

グリム童話と『日本の昔ばなし』の比較

－ 変身について －

Ein Vergleich der Märchen der Brüder Grimm mit den japanischen Märchen über die Verwandlung

太田伸広

要旨：人間の動物への変身は『日本の昔ばなし』では神罰や罰、感情の昇華としての変身であり、人間に戻らないが、グリム童話では魔法や呪いなど異界がらみの変身であり、基本的に人間に戻る。前者は神罰などがあるにもかかわらず宗教的でないが、後者は神様が登場しないのに宗教的である。動物の人間への変身は『日本の昔ばなし』ではありふれており、本当の動物が本当の人間になり、また動物に変身したりするが、グリム童話では本当の動物が人間に変身する話は1話しかない。『日本の昔ばなし』は動物を人間として迎え入れ、子供ももうけるが、グリム童話にはそんな話は1話もない。前者は動物と人間を隔てる壁は低く、動物へのまなざしは暖かく優しいが、後者は動物への視線は蔑みである。前者は輪廻転生、後者はキリスト教の思想（動物を支配すべく人間を神が創造）の影響であろう。また『日本の昔ばなし』には人間や動物さえ神さまになる話もあるが、グリム童話にはない。ここにも一切衆生悉有仏性という仏教思想と神を頂点とする世界秩序を宗教原理とするキリスト教の違いも反映されているであろう。

はじめに

グリム童話にも日本の昔ばなしにも変身の話が数多く見られる。変身に関して、グリム童話と『日本の昔ばなし』には何か違いがあるのであろうか。変身と一口に言っても、人間が動物になったり、動物が人間になったり、人間が植物になったり、あるいは物になったり、その中身はさまざまである。また同じ人間の変身でも、王様に変身するのか、それとも王子か、長者か、お姫様か、庶民か、また動物の変身でも、どんな動物が変身するのか、狐か、鳥か、魚か、そしてそれらによって、グリム童話と『日本の昔ばなし』に何か違いが現れるのか。このように、さまざまな角度から、グリム童話と『日本の昔ばなし』で語られている変身を分析することにする。分析の対象は、グリム童話の場合は、1857年の決定版のKHM 200篇、203話であるが、変身の意義を明らかにするうえで必要と思われる限りで、KHM以外のグリム童話も取り上げる。日本の昔話の場合は、関敬吾氏編集の『日本の昔ばなし』（岩波文庫）第I、第II、第III巻の240話である。グリム童話のテキストは、BRÜDER GRIMM Kinder- und Hausmärchen Vollständige Ausgabe Mit 184 Illustrationen zeitgenössischer Künstler und einem Nachwort von Heinz Rölleke Artemis & Winkler 1949 Winkler Verlag, München, 19. Auflage 1999である。参考にした訳は、金田鬼一氏の『グリム童話集』（岩波書店）である。

それでは、これからそれらすべてを具体的に見てみることにする。死と再生については、また別の機会に論ずることにしたい。

第1章 グリム童話の変身

第1節 人間→動物→人間、人間→動物という変身

1) 男

A. 王様 KHM『92 黄金の山の王様』：黄金の山の王様になった商人の子は、巨人の外套を借りて、蠅に変身し、またもとの姿に戻る。* 王様→蠅→王様。 B. 王子 KHM『1 蛙の王様あるいは鉄のハインリッヒ』：魔女に魔法をかけられ、蛙にされた王子は、お姫様に壁に投げつけられると、人間の姿に戻る。* (王子)→蛙→王子。KHM 9『12 人の兄弟』：妹が千寿菊を折ると、12 人の兄達が鴉になる。暮らしていた家も庭と共に消える。妹が7年間一言も話さず、笑わずに過ごすすと、兄達は人間に戻る。* 王子(12人)→鴉→王子(12人)。KHM 49『6羽の白鳥』：魔女の娘が einen Zauber を hineinnähen した肌着を王子達に投げ、王子達を白鳥に変える。この魔法は、妹が6年間、一言も話さず、笑わず、えぞ菊で肌着を編むと解ける。* 王子(6人)→白鳥(毎晩15分間は人間)→王子(6人)。KHM 57『黄金の鳥』：王子が魔法をかけられ狐にされている。この魔法は、王子を射ち殺し、頭と足を切り取ると解ける。* (王子)→狐→王子。KHM 96『3羽の小鳥』：お姫様が鞭(Roe)で黒犬を殴ると、黒犬は美しい王子に変わる。この鞭は老婆('ne ole Fru)からもらったものである。* (王子)→黒犬→王子。KHM 123『森の中の老婆』：王子は魔女に木に変えられ、毎日数時間白鳩になっていた。魔女の指輪を奪うと、王子は人間の姿を取り戻す。* (王子)→白い鳩(毎日数時間だけで、後は木)→王子。KHM 127『鉄のストーブ』：王子達は魔法にかけられ墓蛙にされていたと思われる。魔法が解けた理由は不明。* (王子達)→墓蛙→王子達。KHM 161『雪白と薔薇赤』：王子は小人に呪われ熊にされた。その小人が殺されると、王子は人間の姿になる。* (王子)→熊→王子。KHM 163『ガラスの棺』：伯爵の息子は、魔法使いの魔術(Zauberkünste)で牡鹿に変えられる。この魔術は、牡牛に変身した魔法使いを殺すことで、解ける。* 伯爵の息子→牡鹿→伯爵の息子。『三人姉妹』：3人の王子は、妹の姫が「魔法つかい」の求愛を「はねつけた」ため、熊、鷲、鯨にされた。「お城」のなかのお姫様の「黒いつくえ」がこわされると、魔法は解け、人間に戻る。(金田訳) * (王子とその子2人)→熊(7日に1日だけ人間)→王子。* (王子)→鷲(7週に1週だけ人間)→王子。* (王子)→鯨(7月に1月だけ人間)→王子。『白鳥王子』：白鳥は「魔法をかけられている王子」で、白鳥のくわえている「糸だまをすっかりほご」すと、その魔法が解けるはずであるが、白鳥は自分の国に帰り、人間の姿に戻って結婚している。(金田訳) * (王子)→白鳥→王子。『ライオンと蛙』：王子は「のろわれて」ライオンになる。「だれか女の子の手が」ライオンを「いとしくおもって」「首を」切ると、人間の姿に戻る。この女の子が王子の妹である。(金田訳) * 王子→ライオン→王子。『兵隊と指物師』：「魔法つかいのばばあ」が「お上におしかりをうけたのを根にもって」若殿を白鳩にする。白鳩はひとりで人間に戻る。(金田訳) * (若殿)→白鳩→若殿。KHM 88『歌って飛び跳ねる雲雀』：ライオンは魔法をかけられた王子だが、光線を浴びて、白い鳩に変身する。この鳩は7年後、ひとりでライオンの姿に戻る。ライオンは、eine verzauberte Königstochter である竜(Lindwurm)を打ちのめし、屈服

させると、竜と共に人間になる。* (王子) →ライオン (夜は人間) →白鳩→ライオン→王子。
 KHM 19『漁師とその妻』: ik bün keen rechten Butt, ik bün'n verwünschten Prins. * (王子) →鱈。
 C. 庶民の大人 KHM 76『なでしこ』: 王子は神の申し子で、王子が望むことはすべて実現される。王子が「むく犬になれ」と言うと、料理人は黒いむく犬になる。最後に料理人を裁くため、王子はむく犬を人間の姿に戻す。* 料理人→黒のむく犬→料理人。KHM 88『歌って飛び跳ねる雲雀』: 王子と王子の家来達が魔法でライオンにされる。王子が竜を打ち負かした時点で、家来のライオン達も人間に戻るはずであるが、叙述はない。* (王子の家来達) →ライオン (夜は人間)。KHM 169『森の家』: 召使達は魔女に魔法をかけられ動物にされる。この魔法は、人間だけでなく動物にも優しい善良な女の子が来ることで解ける。* (召使) →雄鶏→召使。KHM 181『池の中の水の精』: 水の精は狩人を池の中に引きずり込む。妻は夫を救おうと、賢女に相談し、言われた通りにする。すると、狩人が蛙に、妻が蟻蛙に変身し、陸に上がる。陸に上がると人間に戻る。* 狩人の夫→蛙→狩人の夫。『三人姉妹』: 3人の王子は妹の姫が「魔法つかい」の求愛を「はねつけた」ため、熊 (と獣達)、鷲、鯨にされた。「お城」のなかのお姫様の「黒いつくえ」がこわされると、3人の王子の魔法は解け人間に戻る。(金田訳) * (家来達) →「森のけだものたち」(7日の内6日) →家来達。『兵隊と指物師』: 「魔法つかいのばばあ」が「お上におしかりをうけたのを根にもって」「悪党の仕人」三人を「魔力」で「黒犬」、「ねずみいろの猫」、「赤い白鳥」にする。これらは殺される。(金田訳) * (悪党の仕人) →黒犬。* (悪党の仕人) →ねずみ色の猫。* (悪党の仕人) →赤い白鳥。
 D. 庶民の子供、若者 KHM 11『兄と妹』: 兄は魔女が魔法をかけていた泉の水を飲み、鹿になる。そして魔女が焼かれ灰になると、兄が人間の姿に戻る。* 兄→鹿→兄。KHM 141『小羊と小魚』: 継母は子供達が楽しく遊ぶ姿を見て腹を立て、魔術で兄を魚に、妹を小羊にする。彼らは賢女の恵みの言葉で人間の姿を取り戻す。* 兄→魚→兄。KHM 25『7羽の鴉』: 父親が怒りの余り、子供達は鴉になってしまえと叫ぶ。すると息子達7人が鴉になって飛んで行く。この呪いは妹が鴉のいる Glasberg にやってくることで解け、兄達は人間の姿になる。* 兄弟(7人) →鴉→兄弟(7人)。KHM 68『泥棒とその師匠』: 息子は魔法で小鳥や犬など、次々と動物に変身する。* 息子→Vügelken→息子。* 息子→Windhund→息子。* 息子→Perd→Lüning (Sperling) →Fisk→Voß→(息子)。KHM 122『キャベツ驢馬』: 若い狩人はキャベツを食べ、驢馬になる。別のキャベツを食べ、人間の姿を取り戻す。* 若い狩人→驢馬→若い狩人。KHM 191『あめふらし』: 若者は狐の力であめふらしになり、また狐の力で人間に戻る。* 若者→あめふらし→若者。『なまけものとかせぎ者』: 息子達に馬鹿にされた父さんが「呪いをかけ、『だれか、うつくしい女の子が、先方からおまえたちに接吻してくれるまで、からすになって飛んでいる』』と言ったため、鴉になる。「かせぎ者」は「うつくしい女の子」にかわいがられ、人間に戻るが、「なまけもの」の方は、「たれひとり接吻してくれるものがなく、からすのまま死んでしま」う。(金田訳) * (働き者) →鴉→働き者。* (怠け者) →鴉。
 E. 魔法使い KHM 68『泥棒とその師匠』: 魔法使いの師匠は魔術で次々と変身する。最後に雄鶏に化けると、弟子の狐に咬み殺される。* Gaudeifsmeeester→Lüning (Sperling) →Fisk→Hohn。KHM 163『ガラスの棺』: 魔法使いは牡牛に変身するが、自らが魔法で変えた牡鹿(王子)に殺される。* 魔法使い→牡牛。『靴はき猫』: 猫は魔法使いを騙し、はつか鼠に変え、食べる。* 魔法使い→象→ライオン→はつか鼠。

2) 女

A. 王女、お姫様 KHM 88『歌って飛び跳ねる雲雀』：*（王女）→竜→王女。KHM 92『黄金の山の王様』：王女は eine verwünschte Jungfrau と言われているように、魔法をかけられて蛇になっている。この魔法は、商人の息子が schwarze Männer の折檻と斬首に耐え、kein Wörtchen gesprochen hast ことで、解ける。*（王女）→蛇→王女。KHM 93『大鴉』：お后様が行儀の悪いお姫様に、鴉になって飛んでいってしまえばいいと言うと、お姫様は鴉になって飛んで行く。*お姫様→鴉→お姫様。KHM 113『2人の王様の子ども』：お姫様は言葉だけで、魚になり、人間に戻ることができる。*お姫様→魚 Fisk→お姫様。『白はと』：末の馬鹿王子が「神さまのおめぐみがありますように！」と言うと、白鳩が美しい王女になる。（金田訳）*（王女）→白い鳩→王女。 B. 庶民の大人の女 KHM 122『キャベツ驢馬』：女中はキャベツを食べて驢馬になる。また別のキャベツを食べて人間に戻る。*女中→驢馬→女中。KHM 169『森の家』：女の召使は魔女に魔法をかけられ、雌鳥と牝牛にされる。*（召使）→雌鳥→召使。*（召使）→牝牛→召使。KHM 181『池の中の水の精』：狩人の妻が蟾蛙になり、陸に上がる。すると人間に戻る。*妻→蟾蛙→妻。 C. 庶民の女の子、娘 KHM 56『最愛の恋人ローラント』：継子娘は魔女の Zauberstab で、ローラントを湖に、自分を鴨にする。魔女が諦めて帰ると、おそらくそれを用いて、元の姿に戻る。*継子娘→鴨→継子娘。KHM 141『小羊と小魚』：継母の魔術によって、兄は魚に、妹は小羊にされる。賢女の恵みの言葉で人間の姿を取り戻す。*継子娘→小羊→継子娘。KHM 51『鳥っ子』：レンちゃんは 'werde zum Teich und ich die Ente drauf.' と言って鴨になり、自力で人間の姿に戻る。*レンちゃん→鴨→レンちゃん。KHM 69『ヨリンデとヨリンゲル』：大女魔法使いがヨリンデを夜鳴き鶯に変える。eine blutrote Blume で、鳥籠と大女魔法使いに触ると、ヨリンデは元の姿に戻る。*ヨリンデ→夜鳴き鶯→ヨリンデ。*乙女達→鳥→乙女達。KHM 122『キャベツ驢馬』：魔女の娘はキャベツを食べて驢馬になる。また別のキャベツを食べて人間に戻る。*魔女の娘→驢馬→魔女の娘。『ライオンと蛙』：「これ（蛙）も、…魔ものにのろわれていた」。蛙は火の中に飛び込み、「火がきえると」「うつくしい女の子」になる。（金田訳）*（女の子）→蛙→女の子。 D. 女魔法使い KHM 69『ヨリンデとヨリンゲル』：大女魔法使いは、昼の間は Katze od. Nachteule になり、夜は人間の姿になる。*Erzzauberin→（昼間）Katze od. Nachteule→Erzzauberin。 E. 魔女 KHM 122『キャベツ驢馬』：魔女はキャベツで驢馬にされ、毎日3度殴られ、一度しか食事を与えられず、死ぬ。*魔女→驢馬。

第2節 人間→植物→人間、人間→植物という変身

1) 男

A. 王子 KHM 113『2人の王様の子ども』：お姫様は言葉だけで、王子を藪に変え、また元の姿に戻ることができる。*王子→茨の藪→王子。KHM 123『森の中の老婆』：王子は魔女に木（毎日数時間は白鳩）に変えられていた。魔女の指輪を奪うことで、王子は人間に戻る。*（王子）→森の木→王子。 B. 庶民の大人 同上：*（召使達 Bedienten）→木→召使達。 C. 庶民の子供、若者 KHM 51『鳥っ子』：レンちゃんが 'werde du zum Rosenstöckchen,' と言うだけで、鳥っ子は薔薇の幹になる。自力で人間に戻る。*鳥っ子→薔薇の幹→鳥っ子。

2) 女

A. 王女、お姫様 KHM 113『2人の王様の子ども』：お姫様は自由に薔薇になり、また元の姿に戻る。*お姫様→薔薇→お姫様。 B. 庶民の女の子、娘 KHM 160『なぞなぞ』：Drei

Frauen waren verwandelt in Blumen, とある。夫が花を折り取ると、花は元の姿になる。*女3人→花→女(1人のみ)。KHM 56『最愛の恋人ローラント』: 継子娘は恐らく魔女のZauberstabで、美しい花に変身する。魔女が死ぬと、恐らくそれで元の姿に戻る。また継子娘は自力で花に変身する。花は、白い布をかぶされると、娘の姿になる。*継子娘→美しい花→継子娘。*継子娘→花→継子娘。KHM 51『鳥っ子』: レンちゃんは自ら薔薇になる。恐らく自力で人間の姿になる。*レンちゃん→薔薇→レンちゃん。KHM 76『なでしこ』: 王子は神の申し子で、王子が望むことはすべて実現する。*(祈り出した)女の子→なでしこ→女の子。

第3節 人間→物→人間、人間→物という変身

1) 男

A. 王様 KHM 60『2人の兄弟』: 弟の王様が魔女の枝鞭で動物達を叩くと、石になる。それを見た魔女は枝鞭で王様を石に変える。魔女は兄に脅され、枝鞭で石を王様、動物達、商人、職人、羊飼いに返す。*王様→石→王様。 B. 王子 KHM 62『蜜蜂の女王』: 王子達は、苔の下の千個の真珠を探し出すことに失敗し、石になる。真珠探し、海中の鍵探し、3人のそっくりの王女の中で誰が末の王女か見分けるいう3つの難題を、末の王子がやり遂げ、Zauberが消え、兄の王子達は人間の姿に戻る。*王子(長男、次男)→石→王子(長男、次男)。KHM 113『2人の王様の子ども』: お姫様は言葉だけで、王子を教会にし、また元の姿に戻る。同様に王子を池にし、元の姿に戻る。*王子→教会→王子。*王子→池→王子。 C. 庶民の大人 KHM 60『2人の兄弟』: 魔女が枝鞭で人を石にし、人間の姿に戻る。*(商人)→石→商人。*(職人)→石→職人。*(羊飼)→石→羊飼。KHM 6『忠実なヨハネス』: ヨハネスは鴉の秘密の話を王様にしゃべり、石になる。王様が息子の首を刎ね、その血を石に塗ると、石は人間に戻る。*忠臣ヨハネス→石→忠臣ヨハネス。KHM 163『ガラスの棺』: お姫様の召使や家来は、魔法使いによって、青い煙に変えられ、瓶の中に閉じ込められる。この魔術は、魔法使いを殺すことで、解ける。*召使や家来→青い煙→召使や家来。『兵隊と指物師』: 「魔法つかいのばばあ」が「命あるものを、残らず石にしてしまった。」彼女が殺されて、みんな救い出される。*(「命あるもの」)→石→「命あるもの」(金田訳)。 D. 庶民の子供、若者 KHM 51『鳥っ子』: レンちゃんは言葉だけで、鳥っ子を教会、池にする。恐らく自力で人間の姿に戻る。*鳥っ子→教会→鳥っ子。*鳥っ子→池→鳥っ子。KHM 56『最愛の恋人ローラント』: 継子娘は魔女のZauberstabで、恋人を湖に、自分を鴨にする。*ローラント→湖→ローラント。

2) 女

A. 王女、お姫様 KHM 193『太鼓叩き』: なぜ王女が割木にされたのか、不明であるが、炎の中から割木を持ち出して下に置くと、割木は王女に変わる。*王女→割木 Klotz, Holz→王女。 B. 庶民の女の子、娘 KHM 56『最愛の恋人ローラント』: 継子娘は自ら赤い石になる。*継子娘→赤い石→継子娘。KHM 51『鳥っ子』で: レンちゃんは自らシャンデリアになる。恐らく自力で人間に戻る。*レンちゃん→シャンデリア→レンちゃん。KHM 43『トルデオおばさん』: 魔女は、わがまま娘を丸太にして燃やす。*娘→丸太。

第4節 人間→人間→人間、人間→人間という変身

1) 男

A. 聖者 KHM 81『呑気者』: *Petrus→乞食→Petrus。*Petrus→兵隊→Petrus。 B. 王様

KHM 136 『鉄のハンス』：山男が ‘ich bin der Eisenhans, und war in einem wilden Mann verwünscht, aber du hast mich erlöst.’ と言っているが、誰が何のために魔法をかけたのか、王子がいかにして山男を救ったのか、不明である。*（王様）→山男→王様。 C. 王子 KHM 169 『森の家』：王子が魔女に魔法をかけられ、爺さんにされる。この魔法は、人間だけでなく動物にも優しい善良な女の子が来ることで、解ける。*（王子）→白髪の爺さん→王子。 D. 庶民の大人 KHM 147 『若く焼直された小男』：神様が爺さんを火中に押し込み、水で冷やし、恵みの言葉をかけると、20歳の若者になる。*爺さん→20歳の若者。 E. 庶民の子供、若者 KHM 56 『最愛の恋人ローラント』：継子娘はローラントをバイオリン弾きに変える。*ローラント→バイオリン弾き→ローラント。『ハンスばか』：ハンスが「祈る」とすべてが実現する。*「ちびで、がに股で、せむしの若い男」→すらっとした「美男子」（金田訳）。 F. 小人 KHM 64 『黄金の鷺鳥』：小人が自由に変身する。*小人→地下室一杯の葡萄酒を飲み干す男→小人。*小人→国中のパン粉で作った巨大なパンをたいらげる男→小人。

2) 女

A. 王女、お姫様 KHM 113 『2人の王様の子ども』：お姫様が ik will die grade tor Kerke macken un mie tom Pastoer: と言うだけで、牧師になるし、また元の姿に戻ることもできる。*お姫様→牧師→お姫様。 B. 庶民の女の子、娘 KHM 19 『漁師とその妻』：魔法で蝶にされた王子には変身させる力がある。*猟師の妻→豪邸の妻→宮殿の妻→王様→皇帝→法王→猟師の妻。KHM 135 『白い花嫁と黒い花嫁』：神様は怒って、魔女とその実の娘を黒く醜い姿にし、逆に親切な継子娘には、恵みの言葉をかけて、白く美しい娘にする。*魔女の継子娘→白く美しい娘。*魔女の実の娘→黒く醜い娘。

第5節 動物→人間→動物

KHM 191 『あめふらし』：狐が水 Quelle に潜り変身する。*狐→露天商→狐。

第6節 動物→人間

1) 蛙

KHM 63 『3枚の羽』：蟊蛙を黄色い蕪 (gelbe Rübe) の乗物に入れると、驚くほど美しい娘になる。理由は不明である。誰かに魔法をかけられて、蟊蛙の姿をしているとみなすのが自然であろう。これら蟊蛙たちは、本当の動物のように思えない。*蟊蛙→驚くほど美しい娘。KHM 127 『鉄のストーブ』：蟊蛙は王の子供たちになる。恐らく王子とお姫様が大きな川を渡り、3本の剣の上を越え、ガラスの山を越えるという難題を果たしたためであろう。*蟊蛙→王の子供達。

2) 猫

KHM 106 『可哀そうな粉屋の若者と子猫』：斑猫が王女になってハンスを婿として迎えに来る。猫が王女へ変身した理由は、恐らくハンスが猫に7年間仕えたためであろう。‘Nun, das ist eine wunderliche Katze,’ dachte Hans, ... Da nahm sie ihn mit in ihr verwünschtes Schloßchen とあるので、この斑猫も元からの動物ではなく、恐らく王女が魔法にかけられたのでであろう。*斑猫→王女。

3) 馬

KHM 126 『誠実フェレナントと不誠実フェレナント』：誠実フェレナントが白馬で3回輪乗りをすると、白馬が王子に変わる。この白馬は en armen Mann からの贈物である。恐らくこの貧乏人は神様であろう。その神様からの贈物の白馬も本来の動物ではない。*白馬→王子。

4) 針鼠

KHM 108 『針鼠ハンス』：農民が針鼠でもいい、子供が欲しいと言ったため、上半身針鼠の子が生まれる。針鼠の皮を焼くと、ハンスの呪いが解け、完全な人間になる。*上半身針鼠・下半身人間（人の子として誕生）→人間。

第7節 動物→人間→動物→人間

KHM 144 『驢馬』：驢馬は Eselshaut を abwerfen して王子になり、また Tierhaut を überziehen して驢馬になる。最後は Haut を焼かれ、王子の姿でおらざるをえなくなる。*驢馬（王の子として誕生）→王子→驢馬→王子。

第8節 動物→動物

1) 鼠

KHM 63 『3枚の羽』：蟾蛙を黄色い蕪の乗物に入れると、それは美しい娘になり、6匹の二十日鼠は馬になる。*二十日鼠→馬。

2) 馬

『三人姉妹』：馬が蟻に、馬車が胡桃になっていたが、これは恐らく魔法のせいであろう。*馬6頭→蟻6匹。

第9節 動物→植物→動物

KHM 123 『森の中の老婆』：魔女は馬も木に変えていたが、指輪を奪われ、木はまた馬の姿になる。*（馬）→木→馬。

第10節 動物→物→動物

KHM 60 『2人の兄弟』：弟の王様は魔女の枝鞭で、動物達を叩き、石にする。魔女が枝鞭で石にさわると、石はまた動物になる。*動物達→石→動物達。

第11節 植物→物

KHM 63 『3枚の羽』：蟾蛙を黄色い蕪の乗物に入れると、蕪は馬車になる。*蕪→馬車。

第12節 物→物→物（変化）

KHM 19 『漁師とその妻』：魔法にかけられ蝶にされた王子の力で家に変化する。*猟師の Pißputt→Hütt→grooten stenern Pallast→Slott→Slott→Kirch→Pißputt。KHM 85 『黄金の子供達』：es käme alles von einem wunderbaren goldenen Fisch のように、不思議な黄金の魚のせいであらう。*Fischerhütte→Schloß→Hütte→Schloß→Hütte。KHM 87 『貧乏人と金持ち』：神様が善良な貧乏人の望みを叶える。*eine alte Hütte, die alte elende Hütte→ein schönes neues Haus。KHM 106 『可哀そうな粉屋の若者と子猫』：ハンスが猫に7年間仕えたため魔法が解けたのであろう。*ein kleines Häuschen→ein großes Schloß。KHM 127 『鉄のストーブ』：小さな古家が大きなお城に変わる。恐らく王子とお姫様が大きな川を渡り、3本の剣の上を越え、ガラスの山を越えるという困難を克服してきたからであらう。*ein altes kleines Häuschen→ein großes Schloß。『三人姉妹』：3人の王子は、妹の姫が「魔法つかい」の求愛を「はねつけた」ため、熊、鷲、鯨にされる。彼らの住処の変化も恐らくその魔法のせいであろう。「お城」のなかのお姫様の「黒いつくえ」がこわされると、3人の王子の魔法は解ける。最後の馬車が胡桃のからになったのも「魔法の森」の魔法のせいであろう。（金田訳）*ほら穴→御殿（7日のうち1日）→ほら穴。*巢→御殿（7週のうち1週）→巢。*水晶の家→御殿（7月のうち1月）→水晶の家。*馬車→胡桃のから。

第13節 物→消滅→物

『ランプとゆびわ』：御殿が消滅するのは、「うつくしい女の人」が持ってきてくれた「古ぼけたランプ」をお姫様が手放したためである。それを魔法使いから奪い返すと、今度は魔法使いの屋敷が消滅する。（金田訳）＊伯爵の御殿→消失→伯爵の御殿。＊魔法使いの屋敷→消失。

第14節 神様→動物→（神様）

KHM 76『なでしこ』：Gott schickte zwei Engel vom Himmel in Gestalt von weißen Tauben, とある。神様が天使を白鳩の姿にして、塔に閉じ込められた無実のお后様に食料を運ぶ。＊天使2人→白鳩→（天使）。

第15節 魔物→人間→魔物

KHM 99『瓶の中の魔物』：Geist は自由に大男になったり、縮んで Geist に戻ったりする。＊瓶 Glasflasche の中の魔物→大男→魔物→大男。

第16節 悪魔→人間→悪魔

KHM 101『熊皮男』：悪魔は恐らく自力で紳士に変身する。紳士だが、足は einen garstigen Pferdefußである。＊悪魔→非常に立派な身なりの紳士→悪魔。

第2章 『日本の昔ばなし』の変身

第1節 人間→動物→人間

1) 男

A. 長者の子『旅人馬』：「金持の子供」が「宿の女」の「すすめ」る餅の「二つ目を食べる」と馬になってしまいました。「貧乏人の子」が「茄子の東に向いている一本のうちから、茄子を七つとって来て食わせ」と、馬は「元の人間に戻ることが出来ました。」＊「金持の子供」→馬→「金持の子供」。

第2節 人間→動物

1) 男

A. 長者『猿長者』：「貧しい飯もらい坊主の姿」の「お天とうの神さま」が横柄、無礼、強欲の東長者一家を「赤い薬」を入れたお風呂に入らせると、「主人夫婦は猿になりました。子供は犬になり下男は猫になりました。下女は鼠になり、いま一人の下男は山羊になりました。」＊東長者→猿。 B. 長者の子、若者『猿長者』：＊東長者の子供→犬。 C. 庶民の大人『猿長者』：＊東長者の下男→猫。＊東長者の下男→山羊。『片脚脚絆』：継母に苛められ行方不明になった「かっこうという子供」を、父さんは『「かっこう、かっこう」とよびながら、探しまわり「鳥になってしま」った。＊父さん→かっぽう鳥。『行々子』：「足高草履を片方なくした」草履とりが「旦那どのにひどく叱られ」「葦の間」を「血を流しながら」草履を探しまわり、「とうとう行々子になってしまいました。」＊草履とり→行々子。『宝下駄』：「はいて転ぶと、ころぶごとに小判が出てくる」が、「背がひくうなる」宝下駄を、甥から奪い、「下駄をはいてごろごろころがって」小判を山のように出した伯父貴は体が小さくなり「ごんぞう虫」になった。＊伯父貴→ごんぞう虫。 D. 庶民の子、若者『馬追鳥』：継母に叱責された二人兄弟は『「あーほ、あーほ、うまあーほ」と、声のつづく限り叫びながら、野原から野原へ、森から山へ探して歩きましたが、とうとう馬は見つかりませんでした。二人はつかれて折りかさなって眠ると、翌朝は鳥になっていました。」＊兄弟2人→馬追鳥。『郭公』：背中を搔いてくれと頼

んだ母が搔いてもらえず、どうしたはずみか、谷川に転落死した。「これを見て、子供は悲しくなっていて、『かこうかこう』と泣いていました。そこに神さまが現われて、あまり『かこうかこう』と泣いているから鳥にしてやろう…とって、子供をとうとう鳥にしまいました。」*子供→郭公。『水乞鳥』：息子は病気の母親の面倒を見ず、母親は急死してしまいました。「親不孝の息子は、たまげて鳥になりました。」*子供→鳥。 E. 山男『鬼を一口』：「和尚さんは『お前がのみに化けたら教えてやろう』というのと、山男は『おあいご用だ』とって、すぐにのみに化けた。和尚はそののみをとって爪の先でつぶした。」*山男→のみ。

2) 女

A. 長者の妻『猿長者』：*東長者の妻→猿。 B. 庶民の大人の女『猿長者』：*東長者の下女→鼠。『時鳥と継母』：継子娘を苛めて殺した継母は「その罰で、かっこう鳥にな」った。*継母→かっこう鳥。『水乞鳥』：馬に水をやらなかった「博労の嬬」が「その罰で…鳥に生まれかわりました。」これは、再生との境界線上にある。*博労の嬬→水乞鳥。『米ぶき粟ぶき』：粟ぶきと母親は、お嫁に行った米ぶきを「たいそう羨ましがって…うらやましいであ、うらつぶと、歌いながら、つぶつぶとそのまま水の中に沈んで、…うらつぶ（宮入貝）になってしまったそうです。」*粟ぶきの母→うらつぶ貝。 C. 庶民の女の子、娘『鬼のむこ』：妹を殺し、妹に成り代わって殿さまの妻になった姉は「自分のたくらみがわかったので、たいそう恥じて『ああ恥ずかしい、とどろ虫にでもなろう』といいながら…とどろ虫になったということです。」*姉→とどろ虫。『米ぶき粟ぶき』：*粟ぶき→うらつぶ貝。

第3節 人間→物→人間

A. 山姥『観音さま二つ』：「手をつかまえて仏壇から引きずり落した。いままでうつくしい観音さんであったが、『えてえ』とって、もとの山姥になった。」*山姥→観音さま→山姥。

第4節 人間→物

A. 庶民の大人の女『女房鼻くそになる』：「亭主は腹を立てて『やかましい、このはなくそ』というて（「打出の小槌」で）叩いたら、女房は大きな鼻くそになったそうだ。」*女房→鼻くそ。 B. 庶民の子供、若者『天道さん金の鎖』：「兄弟は（天の神さんの金の鎖で）天にのぼり、兄はお月さまになり、弟はお星さまになったそうだ。」*兄→月。*弟→星。

第5節 人間→人間→人間

A. 庶民の大人の男『八つ化け頭巾』：狐から騙し取った「手拭」で変身する。*和尚→姉さま→和尚→姉さま→和尚。 B. 山男『鬼を一口』：「夜中に山男は大入道になって、小僧を一口にたべようとした。」*山男→大入道→山男。

第6節 人間→人間

A. 庶民の大人の男『猿長者』：「貧しい飯もらい坊主の姿」の「お天とうの神さま」が心優しい「貧乏者」の爺さんと婆さんを「黄色い粉」を入れた風呂に入らせると、「十七八の若者になりました。」*爺さん→十七八の若者。『若返りの水』：爺さんが山の「岩の蔭」の「きれいな清水」を飲む。*腰の曲がった爺さん→腰の伸びた若者。 B. 庶民の子供、若者『竹の子童児』：三吉が、天から来た「五寸ばかり」の「竹の子童児」が教えてくれた「ふしぎな呪」を言うと、「ほんとうの侍になった。」*三吉→お侍。 C. 小人『山の神とほうき神』：*三人の小人の翁→三人の娘。『一寸法師』：「お姫さま」が鬼の「打出の小槌」を「せい出ろ、せい出ろ」と「ふると、ふしぎに一寸法師の体が、急にどんどのびて立派な一人前の侍になったということでもあります。」*一寸法師→立派な一人前の侍。 D. 庶民の大人の女『猿長者』：

* 婆さん→十七八の若者。『若返りの水』：「慾深」の婆さんが山の「岩の蔭」の「きれいな清水」を飲み過ぎ、赤児になる。* 婆さん→赤児童。『たから手拭』：「乞食坊主」（弘法大師）が心根の優しい女中に「手拭」をやる。女中が顔を「拭くたびにだんだん美しくなった。…奥さんはその手拭で顔をふいたら馬の顔になった。」* 女振りのよくない女中→美しい女。* 土族の奥様→馬の顔。 E. 鬼婆『三枚のお札』：「和尚さんが『高ずく、高ずく』」というと、だんだんに大きくなって、もう葛籠に手がとどくばかりになった。こんどは『低ずく、低ずく』と唱えると、鬼婆はだんだんに小さくなった。…豆粒のようになったところを、…餅の中にまるめて、ごびっと一のみのにのんでしまった。」* 鬼婆→天井に届く位の大女→豆粒のような小さな女。

第7節 人間→神

A. 庶民の娘『蚕の始まり』：馬の「生皮はそばで見ていた娘の方へ行って、体にぐるぐるっとまきついて天へ飛んで行きました。…それから、馬と娘はいまのおしらさまという神さまになった。」* 娘→おしらさまという神様さま。

第8節 動物→人間→動物

A. 狐『一軒家の婆』：* 狐→80歳位の婆→（狐）。『髪そり狐』：* 狐→若い女→（狐）。* 狐→婆さま、爺さま→（狐）。* 狐→和尚さま→（狐）。『八化け頭巾』：* 狐→美しい姉さま→狐。『狸と狐』：* 狐→人→狐。『文福茶釜』：狐は「くるくると三べん廻ってきれいな姉さまになった。」* 狐→きれいな姉さま→狐。『八反袋ぎつね』：* 狐→姉さま、婆、子→狐（二度）。* 狐→姉さま→狐（袋に入れられ、たたき殺される）。『右目っこ』：狐が化けた爺は、だまされ吠え入り、火棚にあげられ、いぶされ、本性を出す。* 狐→爺→狐。『石肥三年』：* 狐→侍さん→狐。『狐の嫁入り』：* 狐→嫁→狐。『狐女房』：* 千年を経た白狐→くずのは（やすなりの奥方）→白狐。 B. むじな『かます狐』：「尻をじりじりといぶ」られ、「むじなの正体をあらわしてきゅうにしずかになった。」* （むじな）→小坊主→むじな。 C. 狸『化狸』：女は「火あぶりにしてやるぞ」と言われ、狸であることを白状し、謝る。* 狸→女→（狸）。『かちかち山』：狸は「婆さまを叩き殺し」、「皮をはがしてかぶり」婆さまに化ける。「狸は婆の皮をぬいで…奥山へ駆けて行ってしまった。」* 狸→婆さま→狸。『馬の尻のぞき』：* （狸）→美しい女→（狸）。 D. 蛇『母の目玉』：* 蛇→女（房）→蛇→女→（蛇）。『たのきゅー』：* うわはめ（大蛇）→白髪の大きなお爺→うわはめ（大蛇）。『蛇の智どの』：* （蛇）→若い衆→蛇。 E. 魚『魚女房』：* 魚（神様の娘）→女房→魚→女房→（魚）。『聴き耳』：* （くらげ）→うつくしい女→くらげ。『鯉女房』：* 真鯉→若い女（女中）→鯉→若い女（女中）→鯉。『竜宮の猫』：* （魚）→若い美しい女→（魚）。『浦島太郎』：* （魚）→船頭→（魚）。『浦島』：* （魚）→白髪の爺さん→（魚）。 F. 鳥『鶴女房』：* 鶴→立派な女（女房）→鶴。『うぐいすの里』：見るなの部屋（座敷）を覗くと、「女が帰って来…樵夫の顔を見てうらめしうにさめざめと泣き出し…『人間ほどあてにならぬものはない、あなたはわたしの約束を破ってしまいました。あなたはわたしの三人の娘を殺してしまいました。娘が恋しい、ほほほけきょ』」といて鳴いて、その女は一羽の鶯になってとんで行きました。」* 鶯→美しい女→鶯。『うぐいすの里』：「小鳥がとぶように姿をかく」す。すると娘は鶯の姿に戻らない。三人の娘が死んだのは、卵が割れたせいだとも考えられないこともない。* （鶯）→きれいな娘3人→死。 G. 亀『浦島太郎』：* （亀）→乙姫さま→亀。

第9節 動物→人間

『かえるの報恩』：「わあこの山のひぎのぎゃろ（ひきがえる）でごせしだ」*（蟾蛙）→婆さま。『鯉の報恩』：人間の姿のまま夫婦幸せに暮らす。*鯉→いとしげな娘（嫁）。『たにし長者』：「名子（小作人）」が『わが子と名のつくものなら、かえるでもよい、たにしでもよいが』といて、水神さまにお詣りして、願をかけておりました。「一匹の小さなたにしが生まれました。」「わしは水神さまの申し子で、これまでたにしの姿でいたが、今日そなたが薬師さまに参詣してくれたので、このように人間の姿になることが出来た。」*たにし→立派な男。

第10節 動物→動物

『犬と猫と指輪』：「竜宮の娘」である蛇が単に陸に上がったただけであろう。*（竜宮の娘）→蛇→（竜宮の娘）。『狐と獅子と虎』：狐は虎とのかけっこ競争で、虎の尻尾に乗るために蟻に化ける。*狐→蟻→狐。『文福茶釜』：*狐→青馬→（狐）。『鶉と狸』：井ぐいは、頭を張られる狂言の井杭という少年かそれとも川魚の伊具比（うぐい=石斑魚）か。*狸→井ぐい→狸。

第11節 動物→物→動物

『一軒家の婆』：*狐→日暮れ、家（80歳位の婆も）→（狐）。『狸と狐』：*狐→地藏さま→狐。『文福茶釜』：「狐は尻尾をまいてくるくるっと三べん廻すと、じきに立派な唐銅（からかね）の釜になった。」*狐→茶釜→狐。『沼の主のつかい』：沼の主からの贈物の「黄金の駒」は「日に一合の米を食わせると、…金粒一つぶずつ尻から出て来」るので、「ならず者」の「孫四郎の弟」が「一斗ほど…駒に食わせ…た…ところ…駒は…陸中と秋田の国境の山に行ってくつきました。これがいまの駒が獄だそうです。」*駒→山（駒ヶ嶽）。

第12節 植物→動物

『狐女房』：「道満は重箱に柚子みかんを十二入れて来ました。その数はいくらだと、童子丸にたずねました。童子丸もこんどは困って…考えていると、親（の白狐）が乗りうつって『鼠十二匹といえ』と教えてくれました。…いつの間にか十二匹の鼠となっていました。」*柚子みかん→鼠。

第13節 物→人間

『髪そり狐』：狐の力。*地藏さま→赤ん坊→（地藏さま）。『鬼が笑う』：*石塔→庵女さま→石塔→庵女さま→消える。『雪女房』：*しがま→嫁→融ける。『雪女房』（類話）：*（雪）→若い女→融ける。

第14節 物→動物→物

『天ぶく地ぶく』：正月の夢に見た「かめ」の蓋を「隣のごうたれ爺」がとると、正直爺が見た大判小判が蛇に変わっていた。*大判小判→蛇→大判小判。『狐女房』：童子丸（白狐）の呪術か。「童子丸が拍手を三つうつと、すぐに消えてしまいました。」*紙（の細切れを飛ばす）→鳥→消える。『狐女房』：道満（祈祷師）の呪術で。*紙（を切って蛇体を作る）→蛇。

第15節 物→植物→物

『狐女房』：童子丸（白狐）の呪術か。*紙（を植木鉢の中に入れる）→梅の木→消える。

第16節 物→物→物

『髪そり狐』：*（草原）→寺、家→草原。『うぐいすの里』：見るなの部屋を覗かれたため。*（萱の野原）→立派な館→（萱の野原）。『馬の尻のぞき』：*百姓の家の馬小屋、馬の尻穴→多七の家、障子の穴→百姓の家の馬小屋、馬の尻穴。『八反袋ぎつね』：*めめず、馬の糞、川→そうめん、かい餅、せい風呂→めめず、馬の糞、川。『狐の嫁入り』：*（馬の骨30）→

提灯 30→馬の骨 30。

第 17 節 神様→人間→（神様）

『猿長者』：* 神様→飯もらい坊主→（神様）。

第 18 節 神様→動物→（神様）

『聴き耳』：* ねりや（竜宮）の一人娘→鯛→（一人娘）。『浦島太郎』：* 乙姫さま→亀→乙姫さま→亀→（乙姫さま）。

第 19 節 沼の主→人間→（沼の主）

『沼の主のつかい』：* 沼の主→美しい女→（沼の主）。

第 20 節 鬼→人間

『鬼の妹』：「妹と思っていたのは鬼でした。鬼があせっくわを食ってしまって、妹に化けているのだと思って」* 鬼→妹。

第 3 章 グリム童話と『日本の昔ばなし』の比較

第 1 節 変身の総数と割合

変身に関して全体的なことを述べれば、類話を省き、そしてまた死後の変身つまり再生や生まれ変わり（例えば死んで鰻になったり、白い鴨になったりする場合）を省き、さらに異類誕生（婆さんが蛇を生んだり、猿を生んだりするような場合）を省くと、グリム童話には 124 例の変身があり、『日本の昔ばなし』には 95 例の変身がある。グリム童話には、KHM 200 篇、203 話あり、KHM 以外の話 92 『三人姉妹』、142 イ 『白鳥王子』、145 『ライオンと蛙』、147 『兵隊と指物師』、134 『なまけものとかせぎ者』、38 『靴はき猫』、63 イ 『白はと』、60 『ハンスバカ』、130 イ 『ランプとゆびわ』の 9 話を加えると、212 話ある。『日本の昔ばなし』は 240 話である。そうすると、グリム童話では、変身は 58%、『日本の昔ばなし』では 40%ということになる。「物→物→物」という単なる形態変化、つまり、「変身」というより「変化」の例がグリム童話には 11 例、『日本の昔ばなし』には 5 例ある。これらも省くと、グリム童話では、変身は 53%、『日本の昔ばなし』では 38%となる。ちなみに、再生の例は、グリム童話で 5 例（兄→鳥→兄。后になった継子娘→鴨→後の娘。白い花嫁→白い鴨→白い花嫁。真っ黒なけだもの→美しい王子。鳥の丸焼き→蟻蛙）、『日本の昔ばなし』で 9 例（父→鼠。母→鼠。妹→鰻。瓜姫→黒い鳥。鬼婆→蠅。瓜姫→ふくべ。殿さまのお駕籠→一分や小判。お駕籠の先触れ→銅貨。馬→おしらさまという神さま）ある。グリム童話では、再生はほぼすべて文字通りの生き返りである。ところが、『日本の昔ばなし』では、人間が鬼に食われて鼠になったり、鬼婆が和尚に食われて蠅になったり、殺されて鰻、黒い鳥、ふくべ、お金、神様になったり、再生というより、死後の生まれ変わりであり、転生である。日本らしいところは、人間が動物や植物に転生するという点、そればかりか、単に生きものや命あるものだけでなく、物や神様にも転生するという点である。まさに天台本覚論という山川草木悉皆成仏（『あの世と日本人』梅原猛著、NHK ライブラリー 152 P.）である。

第 2 節 人間から動物への変身

1) 人間に戻るグリム童話と人間に戻らない『日本の昔ばなし』

「人間→動物→人間」という変身は、グリム童話では 57 例あり、『日本の昔ばなし』は（鬼婆も加えると）、19（20）例ある。その内、グリム童話では、8 例が元の人間の姿に戻らない。

動物のまま殺されるのが6例、死んでしまうのが1例である。生きておりながら、動物の姿のまま人間に戻らない話は『漁師とその妻』の1篇だけである。動物の状態で殺される話は、すべて殺されなければ人間に戻る可能性があるし、鴉に変身したまま死ぬ話も、誰か接吻してくれる女の人がいれば、鴉は人間に戻ることができる。だから、グリム童話では、たとえ人間が動物に変身しても、人間の姿に戻るし、戻る可能性があると言える。例外は、誰かに魔法をかけられて蝶にされた王子だけである。ただ、この話も魔法を解けば人間に戻れるはずである。ところが、『日本の昔ばなし』では、人間が動物に変身し、また人間に戻る話は『旅人馬』ただ一つである。グリム童話と極めて対照的である。この話では、「宿の女」が「囲炉裏」で「稲の種を蒔き」「田植えをし」「稲を狩りとして、朶をすって搗いて米にし」「餅をつき」、その餅を「金持の子供と貧乏人の子供」にすすめた。金持の子供がこの餅の「二つ目を食べると馬になってしま」った。「貧乏人の子」が「白髪の生えた七十ばかりの爺さま」に教えてもらったとおり「茄子の東に向いている一本のうちから、茄子を七つとって来て食わせ」と、馬は「元の人間に戻ることが出来ました。」「宿の女」はどこか妖しげで妖術を使うようにも思われる。後者の「白髪の生えた七十ばかりの爺さま」は、「貧乏人の子」が「こういうことは、爺さまのような年の人でなければわからんことです。」と言っているように、長年の人生でいろいろな経験を積み、豊かな知恵を持っている人であろうが、どこか神様が巫覡の老翁のような雰囲気がある。この昔ばなしの「金持の子供」は、他の昔話によくあるように、根性が悪く、傲慢で、けちで、欲深いということはない。むしろ非常に素直で、貧乏人の子とも仲よく遊ぶ、善良な子供である。だから、「金持の子供」が馬に変身させられたのは、罰でもなければ、因果応報でもない。全体として、この話は、呪術のようなものを年輪を重ねた人の英知で解く話となっている。一見すると、この昔話は、魔女や魔法使いの魔法や魔術で動物にされるが、賢女の知恵で魔法を解いてもらうグリム童話に似ているように見えるが、日本の昔話には宗教的な雰囲気はまったくない。

2) なぜ変身するか

では、『日本の昔ばなし』の大きな特徴とも言える、動物に変身しても人間に戻らない、その理由をさぐることにしたい。

まず、人間がなぜ動物に変身したか、変身そのもの、変身させる力を見てみよう。『猿長者』で、東長者一家の長者が猿、長者の妻も猿、長者の子が犬、下男が猫、もう一人の下男が山羊、下女が鼠になったのは、「神さま」が、東長者が横柄で、無礼で、強欲だったため、長者一家に罰を与えたからである。『片脚脚絆』では、父親が継母の虐めで家を出て行った郭公という名の子の名を呼びながら捜し歩いてかっこうになる。いわば悲しみが変身の原因である。『行々子』では、草履とりが草履をなくし、旦那に叱られ、血を流しながら草履を探しまわり、行々子になってしまう。これも悲しみ・辛さが変身の原因であろう。『宝下駄』では、伯父が、甥から召し上げた、小判が出るが背が低くなる宝下駄を履き、小判を沢山出そうと思っごころ転がったため、体が小さくなり、ついにごんぞう虫になる。これは見知らぬ「老人」がくれた「宝下駄」のせいであるが、「慾ばり」の自業自得でもある。『馬追鳥』では、馬を見失い継母に叱責された二人兄弟は、馬を探して、野原から野原へ、森から山へと歩いたが、見つからなかった。疲れて二人が眠ると、翌朝は鳥になっていた。この変身の原因は疲労・辛さであろう。『郭公』では、子供が自分のせいで母親が事故死し、それを悲しんで泣いていると、神様が現われて、あまり「かっこうかっこう」と泣いているから鳥にしてやろうとあって、子供を鳥に

する。この変身は明らかに神様の力であるが、その背景として、子供の悲しみ、母親への後悔の念があり、神様がその思いを実現させてあげている。『水乞鳥』では、馬に水をやらす、馬に苦しい思いをさせた博労の嬢が「その罰で…鳥に生まれかわる。この昔ばなしは、再生との境界線上にあるが、死んだと断定もできないので、変身の一つとして扱うが、博労の嬢の変身は、動物を愛護しなかったことへの罰である。もう一つの『水乞鳥』では、息子が病気の母親の面倒を見なかったら、母親が急死する。息子は、たまげて鳥になる。これは驚きのせいである。『鬼を一口』の山男はいとも簡単に蚤に変身する。これは山男自身の変身能力であるので、いつでもまた元の山男に戻れるはずであるが、和尚に潰されて殺されるので、元に戻らない。『時鳥と継母』で、継子娘を苛めて殺した継母は、その罰でかこう鳥になる。この変身はいわゆる罰が当たったためである。『米ぶき粟ぶき』では、粟ぶきと母親は、お嫁に行った米ぶきを羨ましがり、水の中に沈んで、うらつぶ（宮入員）になる。この話では、羨望が母と子を目を変えている。『鬼のむこ』では、妹を殺し、妹に成り代わって殿様の妻になった姉は、自分の企みがばれ、恥じいりながらとどろ虫になる。この変身の原因は慙愧の念である。以上、変身させる力となったものは、神罰6例（『猿長者』1話）、神様の力（悲しみをかなえる）1例（『郭公』）、罰2例（『水乞鳥』と『時鳥と継母』の2話）、自業自得（一種の罰）1例（『宝下駄』）、悲しみ・辛さ（疲労・辛さ）3例（『片脚脚絆』、『行々子』、『馬追鳥』の3話）、驚愕1例（『水乞鳥』）、慙愧1例（『鬼のむこ』）、羨望2例（『米ぶき粟ぶき』1話）、変身能力1例（『鬼を一口』）ということになる。『日本の昔ばなし』に登場する神様は自然宗教的、汎神論的な性格が強いので、罰（ばち）や自業自得も背後に世の常、世の慣わしのような神様がいらっしゃるように思われる。そうすると、『日本の昔ばなし』では、変身の力は、神様10例・5話、深い感情6例・6話、化ける力（変身能力）1例・1話ということになる。自分の行為を恥じ、死んだ母のことを思い深く悲しむ子供を、神さまが鳥にしてやろうと言って鳥にする『郭公』があるが、深い悲しみと慙愧の念は神様に通じるところがある、否神そのものかもしれない。『日本の昔ばなし』では、動物への変身の背後に神様有り、と言えるかもしれない。

神様の下された罰として、あるいは、良くない行いや強欲の罰として、人が動物になったのであれば、元の姿に戻らないのもうなずける。また、神様が深く悲しむ子を鳥にしてやろうと言って鳥にしてやっているのだから、これも元の人間に戻らないのもうなずける。次に、悲しみ・辛さ・疲れ、驚愕、慙愧、羨望からの変身も、神様が鳥にしてやる場合や、眠りに落ち目が覚めると鳥になっている場合が象徴的であるが、神的状態への昇華かそれに近いものであろう。そうだとすると、これまた人間の姿に戻らないのは当然である。唯一人間の姿に戻っても不思議でないのは、何の助けも借らず自ら変身する山男の例である。しかし、これは蚤に変身したところを潰されて殺されるのであるから、当然人間には戻れない。

では、グリム童話ではなぜ人間が動物に変身するのか、これを見てもいいことにしよう。第1章を見ればわかるように、魔法・魔術・呪い48例（魔女8例 KHM 1, KHM 123, KHM 127, KHM 169, KHM 11, KHM 169, KHM 169, KHM 56、魔女の娘1例 KHM 49、女魔法使い7例 147, 147, 147, 147, KHM 69, KHM 69, KHM 69、魔法使い12例 KHM 163, 92, 92, 92, 92, KHM 68, KHM 68, KHM 68, KHM 68, KHM 163, 38、賢女2例 KHM 181, KHM 181、小人1例 KHM 161、后1例 KHM 93、継母2例 KHM 141, KHM 141、父3例 KHM 25, 134, 134、不明11例 KHM 9, KHM 19, KHM 57, KHM 88, KHM 96, 142 イ, 145, KHM 88, KHM 92, 63 イ, 145、）、異界からの贈物5例（巨人の外套1例 KHM 92、キャベ

ツ 4 例 KHM 122, KHM 122, KHM 122, KHM 122)、神的能力 1 例 (神様が授けた願いが叶う子 1 例 KHM 76)、狐の力 1 例 (KHM 191)、自力 2 例 (単に成ると言うだけ 2 例 KHM 113, KHM 51) である。これを見れば一目瞭然であるが、グリム童話で人間が動物に変身するのは、否、正しく表現するならば、人間が動物に変身させられるのは、ほぼすべてが魔法、魔術、呪い、異界からの贈物など、異界がらみである。それが魔女や魔法使いのこともあれば、神様や動物のこともある。異界と関係なさそうなのは、「私…になるわ」と言って、魚と鴨になる『2人の王様の子ども』と『鳥っ子』だけである。この話とて、前者では王様(鹿)にもお后様(胡桃)にもお姫様(クリストッフエルや小人)にも魔法の雰囲気漂う。後者は変身しながら魔女の追跡をかわす話であり、魔法や魔術の世界にある。魔法や魔術であるからこそ、それを解けばまたもとの人間の姿に戻ることができるのである。もし戻らなければ、魔法や魔術に屈したことになり、キリスト教の教えに反する。「コーマックは大声で叫んだ。『イエス・キリストよ、あの娘の魂を救いたまえ!』。聖なる御名を唱える声は彼の唇を震わすや、たちまち恐ろしい唸り声、悪魔のような叫び声はそれに応え、騎士たちの姿は彼の目の前で忽然と消えた。」(『グリムが案内するケルトの妖精たちの世界』下、トマル・C・クローカー編、藤川芳郎訳、草思社、158 P.) このように、魔の世界のものは神(キリスト)の前では退場する必要があるのだ。また、魔法や魔術と関係なさそうな「私…になるわ」と言って、動物になる場合も、自らのうちに变身能力を持っているのであるから、これまた元に戻ることは容易な筈である。

3) 人間の動物へのまなざし

次に、人間が動物に変身したり、させられたりするが、その場合に、人間が動物に対してどういうまなざしを持っているのか、考えてみることにする。

まず『日本の昔ばなし』である。罰としての変身では、人間は、猿、犬、猫、山羊、鼠、虫、水乞鳥、かっこう鳥という動物になる。罰当たりとしてこういう動物になるのであるから、これらの動物は、人間の目からすると、当然のことながら低俗で卑しい。これらの動物への人間のまなざしはまことに冷たい。事が容易でないのは、かっこう鳥である。継子娘を苛めて殺した継母が、その罰としてかっこう鳥になる『時鳥と継母』では、かっこう鳥を見る人間の目は見下したものである。ところが、『郭公』では、かっこう鳥は、母親の死を悲しむ子を神様が変身させてくださる鳥であり、鳥を見る人間の目は上向きである。だから、かっこう鳥へのまなざしは蔑んだものであるが、かすかな温もりもある。悲しみ・辛さ・疲れ、驚愕から変身する場合には、人は、かっこう鳥、行々子(よしきり)鳥、馬追鳥、水乞鳥になる。これらはすべて鳥で、鳥が人の魂が昇天することの象徴となっているように、人のまなざしは少し神秘的である。水乞鳥も罰としてなる場合と驚きの余りなる場合とがあり、二面的である。慙愧と羨望の余り変身する先の動物は、とどろ虫とうらぶつ貝である。これは『鬼のむこ』と『米ぶき粟ぶき』の中の変身であるが、前者では、同じ慙愧でも『郭公』の慙愧とは異なり、殺人と自らの破廉恥な行為がばれた恥であり、懲罰的な側面が強く、また後者は、幸せな結婚を羨んで貝になる話で、美德な面は見られない。したがって、とどろ虫やうらぶつ貝を見る目は冷やかで、因果応報だという蔑んだところがある。

グリム童話では、魔女や魔法使いによって、動物にさせられるのであるから、これらの動物に対する人間の目は、冷たく蔑んだところがある。小人や后、継母や父親が人間を動物に変身させる場合も、その中身はというと、小人は呪いをかけて王子を熊にするし、后は行儀が悪い

娘を鴉にでもなればいいのと言って鴉にし、父親はなかなか帰ってこない子供たちに怒り、鴉にでもなれと言って鴉にしたり、また別の父親は子供たちに馬鹿にされて怒り、呪いをかけて鴉にしたり、ある継母は怒って子供たちに魔法をかけ、魚と小羊にしたりと、呪いや魔法、怒り・呪いの言葉による変身である。これらの場合も、魔女や魔法使いの魔法と同じく、動物にされてしまった人間は、そのことを悲しみ、辛い思いと被害者意識を抱いている。人々の動物へのまなざしは当然のことながら冷たく低い。それは軽蔑のまなざしである。この面からも、動物はまた人間に戻るのであろう。つまり、こんな動物のままにはしておけないという意識である。これらに属する動物は、蛙5、白鳩2、雄鶏2、鹿2、雌鶏、牝牛、鴨2、白鳥（赤い白鳥）4、犬（黒犬2）3、鼠色の猫、夜鳴き鶯、鳥2、熊3、鶯、鯨、熊3、鴉5、魚（鰈）5、小羊、狐2、ライオン4、獣、蛇、驢馬4、馬、雀2、牡牛、象、はつかねずみ、蠅、あめふらしである。この内、鴨は、魔女の継子娘が魔女から逃げるため、魔女の魔法の杖で、その場にふさわしい動物として鴨を選び、自ら変身したものである。また小鳥、犬、馬、雀2、魚2、狐、雄鶏は、魔法使いの師弟が闘いを繰り広げるために、自らの変身してなった動物である。魚や鴨は、単に魚や鴨になるといつてなった場合もある。牡牛、象、ライオン、はつかねずみも魔法使いの変身能力を示したものである。蠅は、外套を羽織ってほんとうに変身することのできる道具なのかどうかを試して変身した動物である。あめふらしは、狐が人間を助けてあげようとして人間を変えた動物である。最後に、蛙の2例は、賢女が水の精から人間を助けるために人間になってもらった動物である。これらの場合、それぞれのシチュエーション、場面で、そこにふさわしい動物に人間が変身しているので、これらの動物に対する人間の目は、下方を向いているとは言えないであろうが、上でないことだけは確かである。その中でも、単なる変身の対象になった馬、雀2、牡牛、象、はつかねずみ、蠅、あめふらしは、蔑みはないだろうが、人間を見る視線と同じではない。これらの動物を省くと、蔑まれた動物は、蛙5、蛇、獣、狐2、熊3、ライオン4、鹿2、牝牛、驢馬、小羊、犬（黒犬2）3、鼠色の猫、鳥18（鴉5、白鳩2、白鳥4、雄鶏2、雌鶏、夜鳴き鶯、鶯、鳥2）、鯨、魚（鰈）5ということになる。この中で、蛙と魚と犬と雄鶏と鴨と鳥、狐、ライオンはまなざしが下方と水平の二面性がある。虎、狼は、実際には変身の例として挙がっていないが、魔女が変身させようとしていたので、蔑みの対象となっている動物である。

4) 動物に変身させられる人間は悪人か

ところが、蔑みの対象としての動物にされる人間は、グリム童話の場合は、KHM 1で魔女に魔法をかけられ蟻にされた王子、KHM 9の鴉になった王子、KHM 19の魔法をかけられ鰈にされている王子、KHM 49の魔女の娘に白鳥にされた王子、KHM 37の魔法で狐にされた王子、KHM 88の魔法でライオンにされた王子、家来、KHM 96の恐らく魔法で黒犬にされていた王子、KHM 123の魔法で白鳩にされていた王子、KHM 127の恐らく魔法で蟾蛙にされていた王子、KHM 161の小人に呪われ熊にされた王子、KHM 163の魔法使いが牡鹿にした伯爵の子、魔法使いに熊や鶯や鯨にされた『三人姉妹』の王子とけだものにされた家来、魔法で白鳥にされた『白鳥王子』、呪われライオンにされた『ライオンと蛙』の王子と蛙にされた女の子、女魔法使いに白鳥にされた『兵隊と指物師』の王子、KHM 169の魔女の魔法で雄鶏、雌鶏、牝牛にされた召使たち、KHM 11の魔女に鹿にされた継子の兄、KHM 141の継母の魔法で魚、小羊にされた兄と妹、KHM 25で父の言葉で鴉になった子供たち、父の呪いで鴉にされた『なまけものとかせぎ者』の子供たち、KHM 92の魔法で蛇にされた王女、恐ら

く魔法で白鳩にされた『白はと』の王女、KHM 69で女魔法使いに夜鳴き鶯にされた娘や乙女達と、普通の人で、悪人ではない。KHM 93でお后様の言葉で鴉にされたお姫様も単に行儀が悪いというだけのことであった。それも抱っこされなければならないほど幼く、unartigだったのは zu einer Zeit に過ぎない。むしろ、普通の可愛らしいお姫様だと言えよう。例外は、KHM 76と『兵隊と指物師』とKHM 122『キャベツ驢馬』の3篇だけである。KHM 76では、神様の申し子の王子が料理人を黒のむく犬にする。料理人はお后様を落とし入れ、お后様からお后様の子(王子)を奪い取った人さらいの悪人である。『兵隊と指物師』では、女魔法使いが魔法を使う悪党の仕人たちを黒犬、鼠色の猫、赤い白鳥にしていた。KHM 122『キャベツ驢馬』では、狩人は、狩人の宝物を奪った魔女と魔法の娘と下女を驢馬にする。ただし、下女は何も悪いことはしていない。このように、グリム童話では、普通の人もしくは善良な人が、魔女や魔法使いなどの魔法、呪い、言葉で動物に貶められ、魔女や魔法使いの悪人ぶりを浮かび上がらせる構図になっている。それだけに、動物にされたことの被害意識、疎外感は一層強いものとなっている。だから、魔に打ち勝ち、人間に戻った時の喜びは大きい。その喜びの象徴が結婚となっているメルヘンはグリム童話にはかなりある。(拙稿「グリム童話と『日本の昔ばなし』の比較 -魔法からの解放結婚について-」『人文論叢』第24号2007年3月参照)ところが、『日本の昔ばなし』では、動物にされる者は、悪人か、どこか道徳的に見て非がある。『猿長者』は横柄で、無礼で、強欲であり、『宝下駄』の伯父も強欲である。『水乞鳥』の博労の婢は馬を苦しめ、もう一つの『水乞鳥』では息子は病気の母親の面倒を見ず、死に追いやっている。『郭公』でも子供は母親の頼みを聞かず、死に至らしめ、『時鳥と継母』では継母は継子娘を苛めて殺している。『鬼のむこ』でも姉は妹を殺し、妹に成り代わって殿さまの妻になっている。このような場合が12話中7話もある。半数以上である。これは、神罰、罰、自業自得のように、悪徳への懲罰としての変身だからである。

5) 変身する人の身分、地位

動物に変身したり、変身させられたりする人の身分、地位は、グリム童話では、王様(商人の子出身)1例、王子18例・37人以上、王女・お姫様5例、庶民29例、7000人以上(大人の男8例、8人以上、子供・若者10例、16人、大人の女4例、子供・娘7例、7000人以上)、魔法使い3例、女魔法使い1例、魔女1例であり、『日本の昔ばなし』では、長者1例、長者の妻1例、長者の子2例、庶民14例(大人5例、子供・若者3例、大人の女4例、子供・娘2例)、山男1例である。性別は、グリム童話では、男40例、女18例であり、『日本の昔ばなし』では、男12例、女7例である。グリム童話には人間が動物に変身する話は58例あるので、庶民の変身が29例で50%、王家の人々の変身が24例で41%で、動物への変身話の90%以上を占める。残りが魔法使い関係者で5例、9%である。『日本の昔ばなし』には人間が動物に変身する話は19例あるので、庶民が14例で74%、長者が4例で21%で、動物への変身話の実に95%を占める。後、山男の変身話が1話あるだけである。両者を比較すると、グリム童話では王家の人々の動物への変身話がかかなり多く、『日本の昔ばなし』では、動物への変身話は庶民中心で、逆に殿様家の変身話がまったくないのが特徴になっている。長者は殿様家ではない。長者はけちで欲が深いことが多い。いわば庶民の中で金のある者である。

次に、この中で、グリム童話の場合、魔法や呪いをかけられて変身を余儀なくされたのは、王子18例、王女4例、庶民22例(男13例、女9例)、魔女1例である。性別では、男31例、女14例である。『日本の昔ばなし』では、神罰や罰、自業自得で動物に変えられたのは、長者

1例、長者の妻1例、長者の子2例、庶民6例である。性別は、男6例、女4例である。このように、グリム童話では、魔法がらみの動物への変身話が44例、77%もある。このような目には合わされるのは、つまりこのような被害者は男性が女性の倍以上を占める。『日本の昔ばなし』で、動物に変身させられる被害話が殿様家に1話もないのは、日本の昔ばなしの動物変身譚が勸善懲悪的な内容の庶民の道徳話となっていることと関係があろう。

6) 人間の動物への変身のまとめ

以上、人間が動物に変身する場合をまとめてみると、『日本の昔ばなし』では、変身能力を持っている山男の例が1例あるだけで、他はすべて神罰や罰としての変身（9例）と感情の昇華としての変身（8例）である。ところが、グリム童話では、ほぼすべて（57例中55例）が魔法、魔術、呪い、異界からの贈物など、異界がらみの変身である。人間が自然に変身する、みずからの内に変身能力を持つ場合はグリム童話の場合も1話（2例）しかない。また、『日本の昔ばなし』では、人間が一旦動物に変身すると、元には戻らない。例外はたったの1話（「旅人馬」）である。ところが、グリム童話では、人間が動物に変身させられても、また元の人間の姿に戻る、厳密に言えば、戻る可能性がある。動物のまま殺されたり、死んで、人間に戻らない例（7例）を除くと、人間に戻らない話は1話だけである。『日本の昔ばなし』では、神罰や罰当たりで動物に変えられる場合が9例と半数もあり、かつ神様が登場する話もあるが、宗教臭さは微塵もない。ところが、グリム童話は神様が登場することはほぼ皆無なのに、普通の人や善人が動物にされ、犯人である魔女や魔法使いなどの魔法や呪いに打ち勝って人間に戻る変身譚が大半（32・33例）を占めるせいであろうか、キリスト教的香りが強く漂っている。

第3節 動物から人間への変身

今度は「人間→動物→人間」の逆の「動物→人間→動物」という変身を考察することにしよう。グリム童話の場合は、動物が人間に変身する話は、KHM 191『あめふらし』、KHM 144『驢馬』、KHM 63『3枚の羽』、KHM 127『鉄のストーブ』、KHM 106『可哀そうな粉屋の若者と子猫』、KHM 126『誠実フェレナントと不誠実フェレナント』、KHM 108『針鼠ハンス』の7篇・7例である。ところが、『日本の昔ばなし』には、動物が人間に変身する話は、33例・28話もある。しかし、その内、人を化かす狐（12例・9話）、狸（3例）、むじな（1例）の例が16例・13話と約半数を占める。

では、その中身を見てみよう。

まず、グリム童話である。『驢馬』では、驢馬→王子→驢馬→王子という変身をする。しかし、この驢馬はほんとうに動物の驢馬なのであろうか。これは驢馬であるが、王家の人と人の間に生まれた人の子である。その時の様子は、sahs (das Kind) nicht aus wie ein Menschenkind, sondern war ein junges Eselein.となっている。人の子には見えず、驢馬の子であった。ところが、この驢馬が人間の姿になるときは Eselhaut を abwerfen するだけであるし、また人に戻るときは Tierhaut を überziehen するだけなのだ。まるで、縫いぐるみの驢馬のようである。この皮を焼かれると、驢馬に戻れず、人間の姿のままではいなければならない。これはとても本当の驢馬だとは思えない。人間が驢馬の皮を被っているに過ぎない。『3枚の羽』では、蟞蛙 (Itsche=Kröte) が ein wunderschönes Fräulein に変身する。この蟞蛙たちは実に怪しげである。頭の弱い末の王子の願い (Teppich, Ring, die schönste Frau) を何でも叶えてくれる。この蟞蛙たちは、もしかしたら魔法をかけられているのかも知れない。少なくともこの世の存在ではない。それは、einen Ring, der glänzte von Edelsteinen und war so schön, daß ihn kein

Goldschmied auf der Erde hätte machen können.という蟷蛙たちの持っている指輪の描写に表れているとおりで、蟷蛙たちは地下の異界の存在である。『鉄のストーブ』でも蟷蛙 (Itsche=Kröte) が変身し、王の子供たちになる。このメルヘンでは最後に die Itschen waren alle erlöst und lauter Königskinder とあるので、王子が誰かの魔法か呪いにかかって、動物にされていたのであろう。本来ならば、これは、(人間)→動物→人間という変身である。ちなみに、この蟷蛙 (王子) たちも森の中 (異界) の小さな古い家に住んでおり、前のメルヘンと同じく箱 (Schachtel) の中から不思議な品 (Nadeln, Pflugrad, Nüsse という異界からの贈物) を出してくれる。『可哀そうな粉屋の若者と子猫』では、ein kleines buntes Kätzchen が王女に変身する。この猫は、ihr verwünschtes Schließchen に住んでいることからわかるように、王女が魔法をかけられているのである。ハンスが猫に7年の間仕えたために魔法が解けたのである。したがって、このメルヘンも (人間)→動物→人間という変身である。『誠実フェレナントと不誠実フェレナント』では、白馬が王子になる。その白馬 (Schümmel) は、誠実フェレナントが見ず知らずの名付け親からもらったものである。その贈物の贈り方が一風変わっている。生まれたばかりの子が14年歳になったら、この鍵で荒野のお城を開けなさい、中のものをあげると言われる。その中にいたのが白馬である。この白馬も異界の動物のようで、主人公の誠実フェレナントにいろいろ知恵を授け、彼を危機的状况から救う。誠実フェレナントが白馬に乗り、3回輪乗りをすると、白馬は王子になる。主人公を助け、主人公が成功した後で、元の姿に戻るこの白馬は、『黄金の鳥』の狐に似ている。この狐は最後に Zauber から解放されて王子になるが、この白馬も恐らく何らかの魔法にかかっていたのであろう。『針鼠ハンス』では、針鼠が完全な人間の姿になる。この針鼠は人の子である。子がなくて子供の欲しい農民が針鼠でもいい、子供が欲しいと言ったため、上半身針鼠の子 (oben ein Igel und unten ein Junge) が生まれたのである。この針鼠は、er ... streifte die Igelshaut ab und ... die Männer ... warfen sie ins Feuer; und als sie das Feuer verzehrt hatte, da war er erlöst,あるように、剥ぎ取った針鼠の皮を焼くと、呪いが解け、完全な人間になる。この場合も『驢馬』と同じく、縫いぐるみのようであり、基本的には人間である。以上、動物が人間に変身する場合、その動物は本来の動物ではなく、元は人間であったのである。つまり、(人間)→動物→人間という変身なのである。その証拠に、以上考察したメルヘンでは、脱皮型変身の『驢馬』を除き、人間になった動物はすべて元の動物に戻らない。そもそも元が動物ではなかったからである。そこにはまた、人間様が動物のままていることは許されないという意識も読み取れる。そうすると、グリム童話では、厳密な意味の動物→人間→動物という変身の話は、狐が水に潜り露天商 (Marktkrämer) になり、また狐に戻る『あめふらし』ただ一つである。

次は『日本の昔ばなし』である。狐や狸が人を化かす話を省略すると、狐の変身譚は『狐女房』だけである。「千年を経た白狐」は、命の恩人「やすなり」の妻に化け、狐を助けた廉で「安倍」に流された瀕死のやすなりの所に行き、やすなりを救う。本当の妻「くずのは」が来たので、狐妻は「信田」に帰り、また狐に戻る。白狐→妻→白狐という変身である。『母の目玉』では、子供たちに殺されかけていた蛇が女に変身し、命の恩人の商人の所へやってきて、妻になる。商人がいつもより早く帰ったある日、妻は「大きな蛇」になり、「とぐろを巻いて」いた。「晩方に」はまた人間の姿になっていた。本当の姿を見られた妻は、夫に別れ話を持ち出す。そして子育てのためと言って「大きな玉」を置いて、出て行く。大切なその玉を殿さまに召し上げられ、子育てに困った商人が蛇妻に会いに行くと、蛇は女の姿になって「ほら穴」

の中から出てくる。その時は、女の姿であったが、普段は蛇になって「ほら穴」の中で暮らしていると見るのが自然であろう。蛇→妻→蛇→妻→（蛇）→女→（蛇）という変身である。『たのきゅー』では、「おおきなうわはめ（大蛇）」が「白髪の大きなお爺」に化けて登場する。そしてうわはめに戻ると、退治されかかる。うわはめ→爺→うわはめという変身である。『蛇の髻どの』は、「まい晩きれいな若い衆」が一人娘の所にやってくる。糸を通した針を「若い衆の髪へ刺」すと、「大きな淵のなか」へたどりつく。そうすると蛇であった。（蛇）→婿→蛇という変身である。『魚女房』では、亀を助けた貧乏な男が招かれて「ねいんや（海底の浄土）」へ行く。お礼に「ねいんやの神さま」の「一人娘」をもらう。「妻はまい日、表座敷のまんなかで障子を立てきて、水を浴びることになっていた。」夫がこれを覗くと魚の姿であった。見られた妻は「もう二人は一代のくらしはできません。」と言って、出て行く。語られてはいないが、魚女房は海に戻って魚になっているであろう。これは魚（海底浄土の神さまの娘）→妻→魚→妻→（魚）という変身である。『聴き耳』は、鯛を助けてやった男の後から「うつくしい女」がやってきて、お礼をしたいと言って、「ねりや（竜宮）」へ誘う。女は「ねりやの王さまの使」だと言う。そして「大きなくらげ」になって、男をねりやへ連れて行く。（くらげ）→女→くらげという変身である。『鯉女房』は、旦那さまに助けてもらった真鯉は、女に変身し、旦那の家で女中として働き、恩返しをする。旦那も喜ぶ。しかし、女が「鮎だやら鯉だやらの尻尾みたいなものを出して」料理を作っているのを見た旦那は、女に「暇を出し」た。女は「川の曲がり角の深みへ来ると、大きな真鯉になってだぶーんととびこん」だ。鯉→女中→鯉という変身である。『竜宮の猫』では、貧乏な三人娘の一番上の娘の髻が年の暮れに「竜宮さま」に「びゃーら（柴薪）」をあげると、「海の中から若い美しい女が出て来た」。そして姉髻を竜宮に連れて行き、またこの世に送ってくれる。（魚）→若い美しい女→（魚）という変身である。『浦島太郎』で、「竜宮の乙姫さまからのお迎えじゃ」と言って浦島太郎を迎えに来た渡海舟の船頭は魚であろう。ここには、（魚）→船頭→（魚）と亀→乙姫さま→（亀）という二つの変身がある。『浦島』で、弟が海の近くであった「白髪の爺さん」は魚であろう。（魚）→船頭→（魚）という変身である。『鶴女房』では、助けてもらった鶴が「目もあてられないような立派な女」になって嘉六の家に来て、嫁にしてくれと言って、嫁になる。嫁は三千両でも売れるような立派な反物を織る。鶴になって反物を織っているところを見られた妻は、千羽ばかりの鶴に連れて行ってもらい、姿を消す。鶴→妻→鶴という変身である。『うぐいすの里』の「野中の森」の「いままで見かけたこともないひと構えのりっぱな館」の玄関から出て来た「美しい女」は、最後に「『人間ほどあてにならぬものはない、あなたはわたしとの約束を破ってしまいました。あなたはわたしの三人の娘を殺してしまいました。娘が恋しい、ほほほけきょ』」といて鳴いて、…一羽の鶯になってとんで行きました。」ここにも、鶯→女→鶯と（鶯）→きれいな娘3人→（死）という二つの変身が見られる。『かえるの報恩』に出てくる婆さまは「わあこの山のひぎのぎゃろ（ひぎがえる）でござしだ」と言って、蛇を退治してくれたお礼に「おんばの皮」を娘に渡す。（蟾蛙）→婆さま→（蛙）という変身である。『鯉の報恩』では、命を助けてもらった色鯉が「いとしげな娘」になって、恩人の嫁になる。この鯉女房は知恵者で、殿様から褒美として大金をもらい、鯉に戻らず、人間のまま夫と婆と幸せに暮らす。色鯉→女房という変身である。『たにし長者』では、子のない長者が水神さまに「たにのような子供でもよいから、どうかわたしに、子供を一人さずけてたもれ。」と祈ると、「一匹の小さなたにしが生まれ」た。たにしは長者の娘をもらい薬師さまに参ったとき「立派

な男」になり、「わしは水神さまの申し子で、これまでたにしの姿でいたが、今日そなたが薬師さまに参詣してくれたので、このように人間の姿になることが出来た。」と言う。田螺→立派な男という変身である。これは人と人の子として動物が生まれる話であり、グリム童話の『針鼠ハンス』や『驢馬』と似ているように見えるが、『日本の昔ばなし』では人の子として生まれた田螺は本来の動物であるが、グリム童話では人の子針鼠も驢馬も基本は人間であり、動物の皮を被っているに過ぎない。

以上で明らかなように、『日本の昔ばなし』で人間に変身する動物は、人を化かす狐や狸はもちろんのこと、白狐、蛇、うわはめ、魚（『魚女房』の魚だけは神さまの娘）、くらげ、真鯉、鶴、うぐいす、蟾蛙、色鯉もすべて本来の動物であり、グリム童話のように、魔法や呪いで動物の姿に変えられているのではない。しかもこの本来の動物たちが人間になり、また元の動物に戻るのである。元に戻らない動物は『鯉の報恩』の色鯉だけである。本当の鯉が人の女房になって、人間のまま幸せに暮らすのである。人の子として生まれた田螺も加えると、動物が人間に変身して、元の動物に戻らないのは、2話だけということになる。このように、『日本の昔ばなし』には動物が人間に変身する話が非常に多く（33例・28話）、ありふれている。そしてその変身は魔術や呪いによるものではなく、ごく自然に人間になる、しかも本当の人間になる。その証拠に『狐女房』、『母の目玉』、『蛇の聲どの』、『魚女房』では人と交わって子供ももうけている。ところが本当の人間になったのにまた動物に戻る（例外2話）。これらの事実は、人間と動物の間を隔てる境界がほとんどないこと、あっても境界の壁が非常に低いこと、人間と動物が近い存在であること、あるいは人間と動物は近い、親しい間柄であること、人間の動物に対するまなざしが暖かく優しいことを示している。これは、人が動物を助け、助けてもらった動物が人間になって人に恩返しをするという、いわゆる動物報恩譚が多いことからわかる。また、人間になった動物が人間のまま元に戻らず、人間たちと幸せに暮らす『鯉の報恩』と『たにし長者』は、いかに動物が人間に暖かく迎え入れられているかをよく示している。この場合、人間は動物を動物として受け入れているのではない。鯉を女房として、田螺を夫として、人間として受け入れているのである。『鶴女房』では、夫は「別れた鶴にあいたくてしようがな」く、「日本中さがし」で歩く。そして「爺さん」に「鶴の羽衣という島」へ連れて行ってもらい、鶴に会い、「しばらくご馳走をうけ」る。すでに人間の姿ではない動物の鶴とまた楽しく過ごすのである。もうここでは、動物を動物だと思っていない。『魚女房』でも、夫は妻が「家を出てしまうと」「淋しくてたまら」なくなる。妻の本当の姿（水浴びをする魚）を見た後なのである。とはいうものの、これら『鶴女房』や『魚女房』に限らず、『狐女房』でも『母の目玉』でも、夫が「見るな」の禁を犯したため（『狐女房』はこの限りにあらず）、鶴女房、魚女房、蛇女房、白狐女房は夫のもとを去って行く。永遠の別れである。これらが異類婚姻譚と言われるゆえんである。つまり、動物と人間の境界はないに等しいといったものの、異類としての境界は依然としてあるのである。また『鯉女房』では、恩返しするために女中に変身した鯉の本当の姿を見た旦那は「こらきっと化物にちがいない。こらはや追い出した方がよい。」と思い、「んな（お前）をおくことがならんすけに、これきりの因縁とあきらめてくれ」と言って、「暇を出」す。これまた人間と動物を隔てるものが厳然としてある。異質なものを排除するまなざしがある。それにもかかわらず、否こういう感情を抱きながらも、動物へのまなざしは、依然として優しい。女が真鯉になって、川に飛び込むのを見届けた旦那は「鯉が恩返しに来たものとわかって、…悲しがった」からである。『母の目玉』では、妻が大きな蛇に

なつてとぐろを巻いているのを見た夫は「こわくなって、隣のうちに逃げて行」き、見られた妻は「別れましょう」と言つて出て行くが、目玉を殿さまに奪われ、子育てに困つた夫は、恐い感情を抱いたにもかかわらず、蛇に会いに行く。蛇は、それに応えて、女の姿で出て来て、子が育つ玉をもう一つかつての夫に渡す。動物にかへつても、蛇は人間的な感情を保つてゐるのである。ここに、動物と人間は違ふというように、單純に割り切ることができない、複雑で微妙な感情が表れてゐる。これら人間と動物の區別と同一という動物観は、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上を生死を繰り返しながら輪廻転生するという仏教思想一特に「靈魂は、前の世の善惡の行為の因縁による。だからある者は蛇・馬・牛・鳥などに生れる。前の世のよこしまな關係によつては、蛇と生まれ変わつて交接し、ある者はきたならしい畜生に生まれ変わるのである。」（『日本靈異記』中田祝夫訳注、講談社學術文庫 S.269）と、動物を人間と區別しながらも、転生による同一性を説き、よつて命あるものの殺生の罪をも説く思想一の影響がないとは言えないであらう。

この『日本の昔ばなし』の動物たち、動物への人間のまなざしに比べると、グリム童話はどうかであらうか。まず、最も目を引く事實は、グリム童話では、動物が人間に変身する話は『あめふらし』ただ一つだけということである。変身の例が123もありながら、たった一つしかないのである。ここでは、狐が露天商に変身し、また狐に戻る。この狐の変身は『日本の昔ばなし』の化かしたり化けたりする狐とたいして変らない。つまり『日本の昔ばなし』に見られたような本来の動物が人間に変身する話は、グリム童話にはないに等しいのである。これはグリム童話の大きな特徴である。これは、キリスト教をはじめ、脈々と続く西欧の人間中心主義と關係があると思われる。特にキリスト教の影響は大きいと思われる。旧約聖書の創世記に「神言給けるは我らに象て我らの像の如くに我ら人を造り之に海の魚と天空の鳥と家畜と全地と地に匍ふ所の諸の昆蟲を治めんと 神其像の如くに人を創造たまへり…海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ」とある。これは次のように解釈できる。「創世記は、エデンの園でアダムが、獸をはじめ、あらゆる生き物の上に立つ、絶対的権力を授かつてゐたことを、人々に想起させる。この、動物に対する人間の至上性は、狼憑きに関する著作の冒頭に、必ずといつていいほど再確認されてゐる。…ポーヴォア・ド・ショヴァンクールはその『狼憑き論』を始めるに当たつて、宇宙における人間の中心的位置を強調する。…人間は…万人すべて、創造主がその創造に当たつて…万物の頂点、完成のきわみとして、お造りになつたものである。筆者はさらに付け加えて、人間は『他のすべての生き物を支配する』ために造られた、という。人間は動物たちが人間を『その主人とも領主とも思い、猛獸たちがその野蠻で孤立した流儀を友好的なものに変える』ほどの権力を、動物たちの上にふるう。アンリ・ボゲも、すべての動物は人間に『服従』するといふ、この教条的な前提を繰り返してゐる。」（『17世紀フランスの悪魔學論争 狼憑きと魔女』ジャン・ド・ニノー著、富樫璽子訳、池上俊一監修、工作舎、1994年、197～198 P.）つまり、「人間の獸への変身という概念は…『嫌惡』すべきもの」（同上 98 P.）なのに、動物のような下等な分際で人間様になるのは許せないのである。例えば、『蛙の王様または鉄のハインリッヒ』の「was der einfältige Frosch schwätzt, der sitzt im Wasser bei seinesgleichen und quakt, und kann keines Menschen Geselle sein. 馬鹿な蛙が何を言おうと、蛙なんて蛙どうし水の中になつて、ゲロゲロ鳴いてゐるだけで、人間の仲間なんかにはなれっこないのだから。」といふお姫様の思ひはそのことを如実に表わしてゐる。ましてや動物が人間になり、その上人間と結婚することなどもつての他なのである。このことは、グリム童話で人

間が動物になる場合に、ほとんどすべてが魔法や魔術、呪いや怒りの言葉で、動物にされている、否人間が動物に貶められていることと深く関連している。魔女の魔法の杖を用いて自ら鴨に変身したり、魔法使いが次々に動物に変身したり、単に、「私…になるわ」と言って魚や鴨になったりする場合も、動物は、魔女などの追跡から逃れるための手段、あるいは魔術の優劣を争う戦いの手段や変身の力を試す手段、人間を救うための道具に過ぎず、動物へのまなざしは蔑みではないものの、冷ややかであり、決して人間を見るのと同じ暖かなまなざしではない。

第4節 その他の変身

1) 人間の植物への変身

人間が植物になる例は、『日本の昔ばなし』には一つもないが、グリム童話には10例もある。ではグリム童話のその変身の中身を見てみよう。『2人の王様の子供』で、お姫様が *ik will die grade to'n Dörenbusk macken un mie tor Rose*, と、単にあなたを茨の藪にし、私薔薇になるわと言うだけで、王子は茨の藪に、自分は薔薇になるし、いとも簡単に元の姿に戻る。ここには王子→茨の藪→王子とお姫さま→薔薇→お姫さまという二つの変身がある。『森の中の老婆』の王子と召使達は、なぜかわからないが、魔女に立ち木にされている。王子→木→王子と召使たち→木→召使たちという二つの変身である。『鳥っ子』では、レンちゃんが *'werde du zum Rosenstöckchen, und ich zum Röschen darauf.'* と、鳥っ子に薔薇の幹になって、私薔薇になるわと言うと、鳥っ子は薔薇の幹になり、自分は薔薇になる。そしてまた恐らく自分たちの力で人間の姿に戻る。ここにも鳥っ子→薔薇の幹→鳥っ子とレンちゃん→薔薇→レンちゃんという二つの変身がある。『なぞなぞ』では、*Drei Frauen waren verwandelt in Blumen*, とあり、3人の女性が花になっていた。この女性たちは、変身させられたのか、変身していたのか不明であるが、*So du heute vormittag kommst und mich abbrichst, werde ich erlöst und fürder bei dir bleiben;* とあるので、魔法か、魔術か、呪いか、何らかの外的力が加わって、花にされていたのであろう。夫が花を折り取ると、その花だけ元の姿に戻る。女→花→女という変身である。『最愛の恋人ローラント』では、魔女の継子娘が魔女から奪った魔法の杖で美しい花や単なる花に変身する。ここにも女→美しい花→女と女→花→女という二つの変身がある。『なでしこ』では、神の申し子である王子は、願ったことはすべて実現する不思議な力を持っている。王子は料理人の依頼を受け、女の子を祈り出す。そしてその女の子をなでしこに変える。そしてまた元の女の子に戻る。女の子→なでしこ→女の子という変身である。

そうすると、人間が植物になる変身は、魔女によるもの（『森の中の老婆』の2例、）変身させられたもの（『なぞなぞ』1例）追っ手の追及をかわす手段としての変身（『2人の王様の子供』の2例、『鳥っ子』の2例、『最愛の恋人ローラント』1例）、父王に紹介するための手段（『なでしこ』1例）、恋人に忘れ去られた悲しみの余り、踏み潰されることを望んだ変身（『最愛の恋人ローラント』1例）ということになる。魔女によって木にされた王子は惨めであろうし、花にされた女性達も悲しいであろう。ただし、後者は軽い遊戯的メルヘンであるからさほど深刻ではない。これ以外の変身も、何らかの手段としての変身であり、その際の植物に対する人間のまなざしは暖かいとは言えない。『日本の昔ばなし』に人間の植物への変身がないことは、草木国土悉皆成仏というように、心を持つもの（有情）だけでなく、心を持たないもの（無情）も等しく扱う思想はあるものの、六道（地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天）の中に植物が含まれていないように、人間は植物へまでは転生しないということなのであろうか。実際、前世の行いが悪くて植物に生まれ変わるとか、罰が当たって植物になったとか、狐や狸

が植物に化けたとかいう話や思想はあまり聞かない。最後に、植物が人間に変身するといういわば逆の話は、グリム童話にも『日本の昔ばなし』にも1話もない。

2) 人間の物への変身

では、次に人間が物に変身する場面を見てみよう。

グリム童話には、人間が物に変身するケースは、『2人の兄弟』（4例）、『蜜蜂の女王』、『2人の王様の子供』（2例）、『忠実なヨハネス』、『ガラスの棺』、『鳥っ子』（3例）、『最愛の恋人ローラント』（2例）、『太鼓叩き』、『トルーデお婆さん』、『兵隊と指物師』の10話、17例ある。『2人の兄弟』では、魔女が枝鞭で王様に触れ、王様を石に変える。魔女は兄に脅され、枝鞭で石にさわる。すると、王様他、動物たち、商人、職人、羊飼いや石にされていた様々な人が生き返る。『蜜蜂の女王』では、兄の王子たちが、苔の下の千個の真珠を探し出すという難題に失敗したことで、石になる。真珠探し、海中の鍵探し、そっくりさんの3人の王女の中から末の王女を探すという3つの難題を、末の王子がやり遂げ、魔法が消え、兄の王子たちは人間の姿に戻る。『2人の王様の子供』では、お姫様が単に王子を教会にするとか池にすると言うだけで、王子は教会や池になるし、また元の姿に戻る。お姫様の意思次第である。『忠実なヨハネス』では、鴉たちの話からわかった、王と後の命を救う秘策をヨハネスが他言したため、石になる。そして王様自ら王子の首を刎ね、その血を石に塗ると、石のヨハネスはまた人間になる。『ガラスの棺』では、お姫様の召使や家来は、魔法使いによって、青い煙に変えられ、瓶の中に閉じ込められる。この魔術は、牡牛に変身した魔法使いが殺されることで、解ける。『鳥っ子』では、レンちゃんが鳥っ子に、教会、池になってと言うだけで、鳥っ子は自力で教会、池になる。またレンちゃんは、シャンデリアになると言って、シャンデリアになる。叙述はないが、いずれの場合も自分の力で人間の姿に戻ったと思われる。『最愛の恋人ローラント』では、魔女から殺されかけた継子娘が、魔女から奪った魔法の杖でローラントを湖にする。魔女が追跡を諦めて帰ってしまうと、元の姿に戻る。さらに継子娘は、赤い石になろうと言って、赤い石になる。その際、魔女の魔法の杖を用いたかどうか不明であるが、おそらくそれを用いたのであろう。『太鼓叩き』では、王女が割木にされている。誰によってそうされたのか、明確ではないが、恐らく魔女のせいであろう。そして炎の中から割木を持ち出して下に置くと、割木は王女に変わる。『トルーデお婆さん』では、魔女は両親の言うことを聞かない娘を丸太に変えて燃やす。『兵隊と指物師』では、「魔法つかいのばばあ」が「命あるものを、残らず石にしてしまった。」（金田訳）彼女が殺されて、みんな救い出される。この内、魔女や魔法使い、あるいは彼らの魔法の道具によって、物に変えられた場合は、11例である。自らもしくは言葉の力で、物に変身する場合は、5例である。秘密を他言したために物に変身させられる場合が1例である。そして物に変えられたり、物になったりしながら、元の人間の姿に戻らない場合は『トルーデお婆さん』の1例だけである。この場合は、親の言うことを聞かない子は、魔女に酷い目に会わされるという教訓話だからであろう。他はすべて、元の人間の姿に戻る。さすがに人を物にしたままでは、ほっておけないのであろう。戻り方は色々である。魔法の道具を用いたり（6例）、難題をやり遂げることで魔法が消えたり（1例）、自らの意志力で、あるいは自然に戻ったり（5例）、最愛の者の血を塗ることで（1例）、魔法使いが殺されることで（2例）、火中から取り出すことで（1例）、人間に戻ったりする。自らもしくは言葉の力で、物に変身する場合は、追っ手から身を守るためであり、物を都合なものと考えているが、それ以外は、さすがに物は人間とは異質なもので、人間が物に変えられたということは、人間

が酷い目に合わされたという被害意識そのものである。

『日本の昔ばなし』で、人間が物に変身するのは、『女房鼻くそになる』、『天道さん金の鎖』、『観音さま二つ』の3話、4例だけである。『女房鼻くそになる』では、「亭主は腹を立てて『やかましい、このはなくそ』というて（打出の小槌で）叩いたら、女房は大きな鼻くそになった」。『天道さん金の鎖』では、「兄弟は（天の神さんが下ろしてくれた金の鎖で）天にのぼり、兄はお月さまになり、弟はお星さまになった」。『観音さま二つ』では、山姥がいつの間にか観音さまに化けて、卯平太の追跡を逃れ、身を隠す。しかし、卯平太が「観音さんは、小豆飯を供えるといつもにっこり笑って右の手をささっしやる」と言って、小豆飯を供えようと、観音さんが「手をさしあげ」た。そこで卯平太は、観音さんの「手をつかまえて仏壇から引きずり落した。いままでうつくしい観音さんであったが、『えてえ』と行って、もとの山姥にな」る。このように、『日本の昔ばなし』では、異界からの贈物の不思議な力や自らの変身能力で物に変身したり、自然に物になったりする。4例しかないが、ほとんどが自然に物になっている。そのせいか、元の人間に戻らない。元の姿に戻るのは山姥だけである。これは狐が化けるとまったく同じで、自ら観音さまに化け、ばれると、化けの皮が剥がされるからである。『女房鼻くそになる』だけは、怒りの言霊のようであるが、笑話的要素が強い話ではある。変身してなった物が、鼻くそ、お月様、お星様、観音様であり、鼻くそを除いて、憧れのもの、聖なるもの、礼拝や畏敬の念の対象であるがゆえに、変身させられたという被害意識はない。

3) 人間の人間への変身

次は、人間が人間に変身する場合である。グリム童話には、人間が人間に変身する場合は、『呑気者』（2例）、『鉄のハンス』、『森の家』、『若く焼き直された小男』、『最愛の恋人ローラント』、『黄金の鷺鳥』（2例）、『2人の王様の子供』、『漁師とその妻』、『白い花嫁と黒い花嫁』（2例）、『ハンスばか』の10話、13例がある。『日本の昔ばなし』には、『猿長者』（2例）、『八つ化け頭巾』、『若返りの水』（2例）、『竹の子童児』、『山の神とほうき神』、『一寸法師』、『鬼を一口』、『たから手拭』（2例）、『三枚のお札』の9話、12例ある。この内、『呑気者』の2例は、ペートルス様が乞食や兵隊の姿で登場する話である。これは広義の変身であるが、いくら聖人といっても、単なる変装の面が強いので、省いてもよいであろう。そうすると、グリム童話でも9話、11例ということになる。

『鉄のハンス』では、王子が魔法をかけられ、ein wilder Mann（野人、山男）にされている。この話、魔法を誰が何のためにかけたかわからないばかりか、なぜ魔法が解けたのかもはっきりしない。『森の家』では、王子が魔女に魔法をかけられ、白髪の爺さんにされている。この魔法は、人間だけでなく動物にも優しい心の善良な女の子が来ることで、解ける。『若く焼き直された小男』では、神様が爺さんを火中に押し込み、水で冷やし、恵みの言葉をかける。すると爺さんは二十歳の若者になる。『最愛の恋人ローラント』では、継子娘がローラントをバイオリン弾きに変える。この変身では、継子娘は恐らく魔女の魔法の杖を用いたのであろう。『黄金の鷺鳥』では、小人が地下室一杯の葡萄酒を飲み干す男になったり、国中のパン粉で作った巨大なパンをたいらげる男になったりする。『2人の王様の子供』では、お姫様が牧師になると言って、牧師になるし、また元の姿にも戻る。『漁師とその妻』では、魔法にかけられ鱈にされた王子が、猟師の妻を豪邸の妻、宮殿の妻、王様、皇帝、法王、猟師の妻へと次々に変える。『白い花嫁と黒い花嫁』では、神様は怒って魔女とその実の娘を黒く醜い姿にする。そしてそれと反対に、親切な継子娘には恵みの言葉をかけて、白く美しい娘にする。『ハンスば

か』では、ハンスに「祈る」ことすべてが「そのとおりになる」という能力があり、「ちびで、かに股で、せむしの若い男」のハンスが、長身のすらっとした「美男子」になる。現状よりも悪い方への変身、変身させられたと被害意識の残る変身は、野人、白髪の爺さん、魔女とその娘の4例である。これに反し、現状よりも良い方への変身は、二十歳の若者、豪邸の妻、宮殿の妻、王様、皇帝、法王、白く美しい娘、美男子の8例である。どちらとも言えない便宜的な変身は、バイオリン弾き、葡萄酒飲み男、パン食い男、牧師の4例である。それから、魔法や魔法がらみによる変身が4例、神様による変身が2例、自ら変身したり、変身能力のある場合が4例ある。

『日本の昔ばなし』の『猿長者』では、「お天とうの神さま」が心優しい「貧乏者」の爺さんと婆さんを「黄色い粉」を入れた風呂に入らせ、「十七八の若者」にする。『八つ化け頭巾』では、和尚が狐から「手拭」を騙し取り、それで姉様に化けたり、また元の姿に戻ったりする。『若返りの水』では、腰の曲がった爺さんが山の「岩の蔭」の「きれいな清水」を飲むと、腰が伸びた若者になる。ところが、「慾深」の婆さんは同じ「きれいな清水」を飲み過ぎて赤児になる。『竹の子童児』では、三吉が、天から来た「五寸ばかり」の「竹の子童児」が教えてくれた「ふしぎな呪」を言うと、「ほんとうの侍」になる。『山の神とほうき神』では、三人の小人の翁が三人の娘になる。『一寸法師』では、お姫さまが鬼の「打ち出の小槌」を「せい出ろ、せい出ろ」と「ふると、ふしぎに一寸法師の体が、急にどんどんのびて立派な一人前の侍」になる。『鬼を一口』では、山男が大入道になる。『たから手拭』では、心優しい女中が「乞食坊主」（弘法大師）にももらった「手拭」で顔を拭くと、そのたびにだんだん美しくなる。ところが、心根の悪い奥さんがその手拭で顔をふくと馬の顔になる。『三枚のお札』では、鬼婆が自由に巨人になったり、豆粒のように小さくなったりする。現状よりも悪い方への変身、変身させられたと被害意識の残る変身は、赤児、馬顔女の2例である。これに反し、現状よりも良い方への変身は、若者3例、侍、立派な侍、美人の6例である。どちらとも言えない便宜的な変身は、姉様、三人の娘、大入道、巨人、小人の5例である。そして異界からの贈物による変身が4例、神様によるもしくは神様と関係する変身が『日本の昔ばなし』には3例、自ら変身したり、変身能力のある場合が4例ある。

人間の人間への変身で、グリム童話と『日本の昔ばなし』の相違は、グリム童話には、何らかの魔法や魔法がらみによる変身が4例もあるが、『日本の昔ばなし』には、それが無いことであろう。その代わり、『日本の昔ばなし』には異界からの贈物による変身が4例もあるが、グリム童話にはそういう変身は1例もない。それから、あえて僅かな相違を挙げれば、『日本の昔ばなし』はどちらかと言えば、良い方への変身が多いと言えよう。グリム童話の豪邸の妻、宮殿の妻、王様、皇帝、法王は、同一人物の変身だからである。

4) 人間（と動物）の神への変身と神の人間（と動物）への変身

『猿長者』に、神様が人間に変身する場面がある。「お天とうの神さまが、人の心を見るためにおりて来られました。神さまは、貧しい飯もらい坊主の姿になって、まず東長者の家へ行って『まことにすまないことであるが、行きどころがないからどうか宿をかしてたまわれ』と、申されました。」と、神様は飯もらい坊主に変身している。そして「ぐずぐずいうと骨うち折ってとらせるぞ」と言って神様を追い払った東長者夫妻を神様は猿にし、神様を親切に受け入れた貧しい西長者の老夫妻を十七八の若者に変える。神様が人間に変身する話はグリム童話にもある。『白い花嫁と黒い花嫁』で、神様が Da kam der liebe Gott als ein armer Mann zu ihnen

gegangen と、『猿長者』と同じように、貧乏人の姿で登場する。そして神様は、横柄で不親切な魔女とその娘を呪い、黒く醜い姿に変える。しかし、親切な継子娘は白く美しい娘にしたばかりか、お金が無尽蔵に出る財布と天国も継子娘に約束する。der liebe Gott といえばキリスト教の神である。また、神様が動物の姿になって現れる話も『日本の昔ばなし』には2話（『聴き耳』、『浦島太郎』）ある。グリム童話には、神様が天使を白鳩にして人間のもとへ遣わす話（『なでしこ』）が1話ある。

ところが『日本の昔ばなし』には人間が神様に変身する話もある。『蚕の始まり』で、馬の「生皮はそばで見ていた娘の方へ行って、体にぐるぐるっとまきついて天へ飛んで行きました。…それから、馬と娘はいまのおしらさまという神さまになった。」とある。このように『日本の昔ばなし』では人間もそして馬さえも神様になる。このような話はグリム童話には一つもない。

この理由は次のような日本と西欧の文化的、宗教的相違にあらう。日本では、アニミズム、多神教的な神道以外に、『涅槃経』に「一切衆生悉有仏性」とあるように、命あるものはすべて、もちろん人間も動物も仏様になるという仏教思想がある。これら日本人の心の中に流れる長い伝統的な思い、考えが昔ばなしにも反映しているのであらう。これに対し、唯一神を仰ぐ一神教のキリスト教が支配してきた西欧では、動物が人間になることさえ不当であるのに、動物（人間）が全知全能の絶対者である神様になるなどとんでもないという思い、もしくはそんな神を仰ぐのは邪教で、許されることではないという根深い信念があるのであらう。